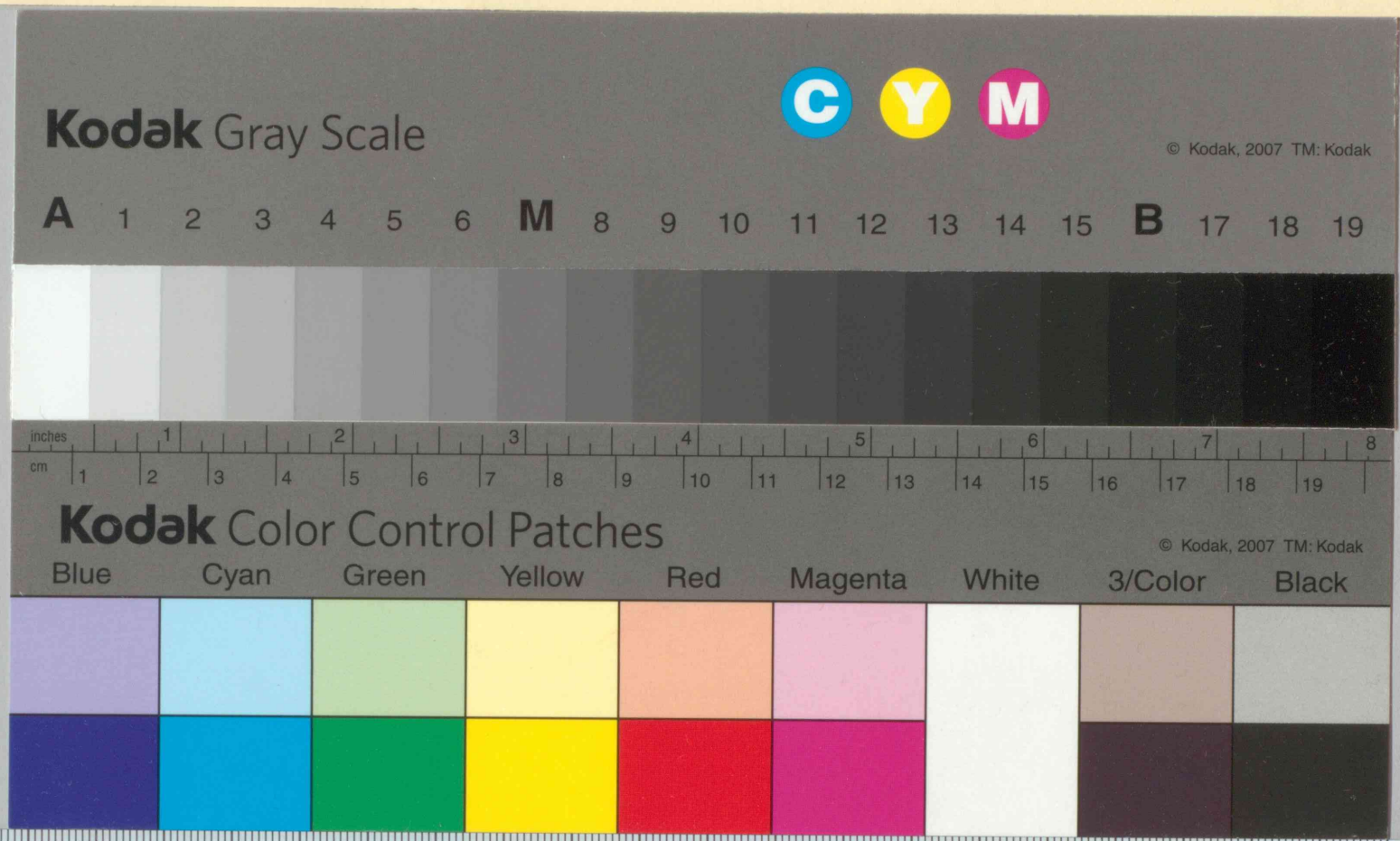
42140
教科書文庫
4
810
42-1916
20000
264227



375.3
Da20
貴科室

資料室

375.9
Sa20

大正五年一月二十二日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

佐藤球
鹽井正男 共編

改訂高等女學讀本

東京 株式會社 明治書院

廣島大學
26427
圖書

改訂 高等女學讀本 卷五目次

一、昭憲皇太后十二德の御歌（和歌）……一
二、皇室に關する敬語……四
三、水車（韻文）……三
四、卽興……一一
五、農人形……一四
六、南京の壺（口語文）……一七
七、格言……二三
八、勤儉……二四

九、人の一生……三〇
一〇、家康公黑鶫を斥く……三二
一一、日光の曾遊を懷ふ　その一……三四
一二、日光の曾遊を懷ふ　その二……三九
一三、春日局……四三
一四、松平信綱の幼時……五〇
一五、山吹の花（和歌）……五四
一六、文　字（口語文）……五五
一七、女流の俳句……六二
一八、松川浦……六六
一九、我が故郷（口語文）……七二

二〇、植物と氣象との關係　その一……七八
二一、植物と氣象との關係　その二……八三
二二、四季の月（韻文）……八七
二三、ナイチンゲール　その一……八九
二四、ナイチンゲール　その二……九四
二五、赤十字社……九九
二六、乃木大將……一〇三
二七、朝鮮の風俗（口語文）……一一〇
二八、ボートサイドより（書簡文）……一一六
二九、太平洋（韻文）……一二〇
三〇、獨立戰爭……一二一

三一、ロッス夫人その一……一二五
三二、ロッス夫人その二……一二九

卷五目次終

東京大學圖書之印

改訂高等女學讀本卷五

一、昭憲皇太后十二德の御歌

節制

花の春、紅葉の秋のさかづきも、
ほどほどにこそ酌ままほしけれ。

清潔

白たへの衣の塵ははらへども、
憂きはこゝろのくもりなりけり。

勤勞

磨かずば、玉の光は出でざらむ、
人のこゝろもかくこそあるらし。

沈默

過ぎたるは及ばざりけり、假初の
こと葉もあだに散らさざらなむ。

確志

人ごゝろかゝらましかば、白玉の
またまは火にも燒かれざりけり。

誠實

とりどりにつくる插頭の花もあれど、
にほふ心のうるはしきかな。

溫和

亂るべきをりをばおきて、花櫻
まづ笑むほどを習ひてしがな。

謙遜

高山のかげをうつして行く水の、
低きにつくをこゝろともがな。

順序

奥ふかき道もきはめむ、物事の
もとすゑをだに違へざりせば、

節儉

吳竹のほどよき節を違へずば、

する葉の露もみだれざらまし。

寧靜

いかさまに身は碎くとも、むら肝の
心はゆたにあるべかりけり。

公義

國民をすくはむ道も、近きより
おしおよぼさむ、遠きさかひに。

二、皇室に關する敬語

大日本は神國なり。神孫相繼ぎて萬世一系の皇位を踐み給ふ。かみは上又は神にて、天皇は上卽ち神にまします。現つ

帥—師

御神と稱へ、現人神と申し奉るも其の故なり。すめらみことは天下を統治し給ふ御方の義にして、みかどと申すは、うちつけに御身の上を申すを憚りて、宮門を指していへるなり。漢語を用ひては、天皇・皇帝・至尊・聖上・主上・今上等と申し、又、陸海軍を統率し給ふより大元帥と申す。高御座・天位・寶祚・宸極等は皇位を申す語なり。

みや(御屋)・みくるま(御車)・みゆき(御行)の如く、みを冠して敬稱とし奉ること多し。みゆきを行幸・臨幸といひ、還りますを還幸・還御といふ。太皇太后・皇太后・皇后・皇太子・皇太子妃のいでましを行啓といひ、還りますを還啓といふ。又、皇族方のいでましを御成といふ。

みくるまを車駕・龍駕といふ。乘輿・鳳輦・鸞輿は御輿なり。故に「鸞輿いづくにまします」「車駕某地に幸す」などいへば、やがて天皇を指し奉る語となる。

みやは御居處なり。九重・內裏・御所・皇居・宮城といひ、又、禁中・禁裏・禁廷・禁闕・鳳闕ともいふ。行幸の閒、しばし留らせ給ふを駐驆又は駐輦といひ、其のおはします處を行宮又は行在所といふ。鹵簿は行幸啓の行列なり。

簿—薄

天皇の御見聞・御感想・御思慮を稱し奉るには、みそなはす・聞し召す・おぼしめす等の古語の外、漢語にては天聞・天聽・天覽・天德・叡感・叡聞・叡慮・聖聞・聖旨・聖鑑・宸襟・宸慮の如く、天・叡・聖・宸等の語を冠すること多し。又、御尊體・御容貌・御動靜に關す

宸—震

る敬語として、玉體・龍體・天顏・龍顏・玉步等を用ひ、御寫眞・御畫像には御影・聖影といひ、御寫眞に限りて御眞影ともいふ。出入せさせ給ふを出御・入御といひ、御座を玉座といひ、臨時の御休憩所を便殿といふ。

天皇の御言はおほみことと・みことのり、又、上諭・敕諭・敕命・敕語・綸言・宣旨・御沙汰等と申す。宸翰・宸筆は御書なり。御作の詩歌を御製といひ、御盃を天盃といひ、御機嫌を天機といふ。

皇太子を東宮と申し、又、春宮・儲嗣・儲君・儲貳と申す。皇子孫の生まれさせ給ふを降誕といひ、內親王・女王の臣下に嫁し給ふを降嫁といふ。

寶算・聖壽は天皇の御齡なり。天皇及び三后のかくれます

を崩御といひ、皇族には薨去といふ。

天皇及び三后の敬稱に陛下、皇族の敬稱に殿下を用ふべきは、皇室典範に明なり。

かくの如く皇室に關する敬語は極めて豐富なり。上古皇室にのみ用ひたる敬語にして、めす・おぼす・のたまふの如きは、中古以來、或は攝關に、或は將軍に、尙廣く移りて一般貴人に對する敬稱となりたれども、其の大部分は儼として使用を誤ることなし。これ君臣の分あきらかなる我が國體の然らしむる所にして、他國に其の類例を見ざるなり。

（高等小學讀本）

三、水車（尾上八郎）

のぼらば瀧に續くらむ、
岩切りとほし行く水の
流のきしに小屋見えて、
あやふくかゝる水車。

たゞかりそめの板ぶきに、
のせたる石も苔むしぬ。
さゝぬ窗より見入るれば、
守り居る人はまだ若し。

あらしやー
たちぬらむ

山のあらしやたちぬらむ、
人にしられぬたにの花、
あをき流をいろ〳〵に
染めてもこゝによりてきぬ。

つと汲まれたる山ざくら、
ただしろたへに一めぐり
めぐると見れば、うち續き
のぼる椿のくれなゐや。

み山の春を手すさみに、

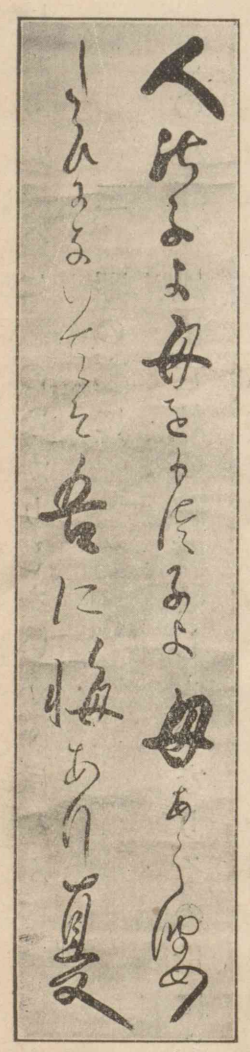
北條・那古
安房國安房郡。

汲みては又も汲みこぼし、
長き日ねもすあかぬまに、
くるまも老いむ、はた、人も。

四、卽興

一、水村

村あり、家五軒。川あり、舟一艘。橋あり、柳三株。こはこれ、北條より那古へ通ふ路にて見たるところ。水村の風景よくそな



落合直文筆蹟

はれり。たゞ余に歌のなかりしをいかゞはせん。

二、琴の裏に

この小琴松風は、亡妹の祕藏せしものなり。その世にありし頃は、こを聞きて心慰めしこともありけるを、今はなかなかにあだなる形見になりてけり。こをかきならさんには、その音はむかしに變らざらん。たゞその人なきをいかにせん。あはれ。

三、巡禮

追分に櫻の老木一もとありそのの下に石の地藏たてり。蒲公英・菫菜など、そのあたりをめぐりて咲けり。長き日もはや暮れんとす。年九つばかりなる巡禮あり、左の方の道を辿り

菫—董

てゆきしが、やがて、詠歌を誦する聲、霞の底に聞えたり。あはれ、かの子よ、今宵何處に宿らんとかする。

何處に—宿らん

四、鐘聲

西の都のある寺に詣でしに、小法師の衣の袖をうしろのかたに結びかけて、鐘つき居たるを見たり。それよりは、いづこの鐘聞くにも、そのさま思ひ出されて、一しほあはれを覺ゆることとなりぬ。その後、東の都のある寺にて、しるし半纏とかいふもの著たる下衆男の、脛もあらはなるが撞き居たるを見たり。それよりは、また、いづこの鐘聞くにも、そのさまの思ひ出されて、更にあはれも覺えずなりぬ。ひとしく無常を告ぐる鐘の聲なりされど、西の都の鐘の響ならでは、わが

鐘—鍾

涙はいづべくもあらずてなん。（落合直文―萩之家遺稿）

五、農人形

往昔、繼體天皇が宣らせ給ひし「一婦織らざれば萬人凍え、一夫耕さざれば萬人飢う」との聖詔は、申すも畏きことながら、今もなほ貴き勸農の訓として、人々の仰ぎ奉る所なり。近くは武門の治となるに及びても、諸侯の農を重んじて、これを勸めたりし蹟の觀るべきもの亦少なからず。

水戸の常磐公園は、わが邦三公園の一と稱せらる。その小高き丘陵に立つ時は、仙波沼を隔てて、遠く一帶の郊野を雙眸の中に收むることを得べし。園は烈公德川齊昭の創築せ

一婦織らざれば云々　元年三月の詔に、「士有二當年而不レ耕者一、則天下或受二其飢一矣、女有二當年而不レ績者一、天下或受二其寒一矣」。

侯―候

三公園　金澤の兼六園、岡山の後樂園、水戸の偕樂園。

烈公

し所に係り、名づけて偕樂園といふ。蓋し「民と偕に樂しむ」といふ義に取れり。されば、四時士民の來り遊ぶにまかせ、花蔭に行廚を披きて、一日の歡娛を盡さしめ、月下に瓢を傾けて、一夕の清遊を縱にせしめきといふ。公園には、今もなほ素燒の人形を鬻げり。その形や、結髮の老農が、積藁の側に胡坐して、笠をその前に置ける狀に取る。製法極めて粗なりと雖も、亦頗る雅致に富めり。世人呼んで、これを「烈公の農人形」といふ。齊昭、居常、深く心を農事に致し、屢〻偕樂園中の小亭に登臨して、親しく稼穡の艱難を察しき。嘗て銅を以て農人形を鑄しめ、常にこれを座

農人形

水戸侯治紀の第三子、兄に繼いで封を襲ふ。萬延元年薨ず。年六十一。

民と偕に樂しむ　孟子に、「古之人、與レ民偕樂、故能樂也」。

小亭　好文亭なり。

穡―檣

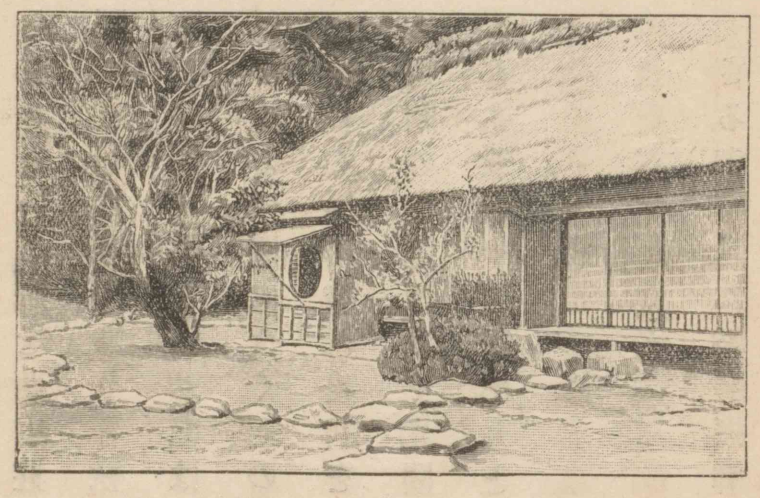
右に置けり。その食膳に向ふや、必ずまづ初穂の意を以て、一箸の飯粒をこれに供へ、然る後に食するを例とせりといふ。

或時のことなりき、齊昭、

朝な〳〵飯食ふごとに忘れじな、
恵まぬ民に恵まるゝ身は。

といふ一首の和歌を侍臣に與へていへらく、「古より、賢君は民を見ること、猶慈母の赤子におけるがごとしといへり。されど、われは少しくこれと異なり、百姓をばわが乳母なりと思ふ。われは百姓に向ひて何等の憐を施さざれど、百姓はわが爲に命を繫ぐべきものを貢ぎぬ。その恩や、乳母と何の擇ぶ所かあらん」と。爾來、侍臣等は農民を呼びて、御百姓といふ

箸―著
猶―おけるがごとし
憐―隣



光圀　頼宣の子、家康の孫。元祿十三年薨ず。
菟裘　致仕隠居の地をいふ。左傳に出づ。

せらるゝ大日本史は、實に公の監修せられたりしものなり。

に至れり。今嚮ぐところの農人形は、蓋し齊昭の作られし者を摸造したるなり。先哲の意を勸農に用ひしや、また懇到なりと謂ふべし。

齊昭の祖先なる義公德川光圀も、亦嘗て菟裘の地を太田の鄕西山といふところに擇びぬ。西山莊地は水戸を距ること數里にあり。かのわが邦第一の大著作と

公は又暇ある毎に、農民を茲に引見して、親しく農事を談ぜられきといふ。庵を西山莊と稱す。庭前に心字の池あり。池を隔てて谷あり、山あり。春秋の觀賞兩つながら好し。名づけて櫻が谷・觀月山といふ。室は廣さ十數人を容るゝに過ぎず。殊に、書院との閒に全くその閾を撤したるは、貴賤の別を離れて、親しく農民等と談話を交へんとする意に出でたりと聞く。齊昭の精神は、多く光圀より得來る。その意を農事に用ふるも、亦承繼する所ありと謂ふべし。（田園都市）

撤―撤

六、南京の壺

さる御町内に婚禮振舞がござりました。お年寄をはじめ、

お年寄

町役、家持の人々、一同に座に著きますると、さま〴〵の馳走がある。時にかの年寄は、酒と聞いては笹の露にも醉ふほどの下戸ぢや。座中を廻る盃の閒、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちとお菓子なりとも御取り下され」と、南京の古染附の壺に大輪の金米糖を入れて、年寄の前へ持つてくる。座中も、「これはよいお心づき、ひらにお菓子をめしあがれ」と勸めると、年寄もわるうはなし、「しからば頂戴を致しませう」と、壺を引きあげ、手首を突つこみしなに、少しきしむやうに覺えたが、無理に手をさし入れて撮み出さうとするに、手首がつまつて拔けませぬ。どうぞして拔けるかと、色

町年寄。名主を管す。
町役　町役人の略。名主、五人組等をいふ。

壺―壺

しからば―致しませう

色にこじまはして見ても、引つぱつて見ても拔けず。まごまごして居られると、側から見つけて、「どうなされましたぞ」。「いや、手が少しつまりまして、思ふやうに拔けませぬ」と、眞顏になつていはれる。「それはお氣の毒。私が壺を持つて居りませう、無理無體に手をお引きなされ」と、一人が向うへまはつて、壺をつかまへ後へ引くと、年寄は手を前に引く。互に「えいや」と引き合ふ有樣、景清と美保の谷が鍛曳をするやうなと、座中が一同にどつと笑へど、年寄はなか〳〵笑はず、泣顏になつて、「どうも痛んで拔けませぬ」といふ。さあ、これから大騷になり、「醫者どのを呼んで來い。骨接ではゆくまいか」と、酒宴の興も醒め果てました。

景清、美保の谷　惡七兵衞景清。美保の谷十郎。

醒—醒

時に、五人組が一人進み出で、「いづれもお騷ぎなさるな。われら承つたことがある。『昔、司馬溫公といふ人、幼きとき、大勢の小兒と共に、大いなる壺のほとりに遊びましたが、一人の小兒、誤つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供はこれを見て逃げ歸つたが、司馬溫公一人は歸らず、側なる手ごろの石を取つて、かの壺へ投げ附けましたれば、壺は割れて、はまつた小兒は不思議に命を助かりました』と、或人の話ぢや。今、お年寄の御難澀は、この話によう似てある。いざや、われらが司馬溫公となつて、譬へば、その古染附の壺が、失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ」と、しかつべらしく煙管をひつさげ、向うへ廻れば、年寄は氣の毒さうに、

司馬溫公　名は光、字は君實、溫公は諡。宋の名相。

壺をかぶつた手を突き出すと、只一打に打ち碎いた。何がさて、座中は金米糖がちらかつて、雪を降らしたやうになると、「やれ、お年寄お助かりなされたか」と、その手を見れば、拔けぬこそ道理。金米糖を一杯攫んでゐられたと申すことぢや。なんと可笑しい話ではござりませぬか。

攫んだものを放しさへすれば、自由自在に手は拔けたものを、一度攫んだら、首がちぎれても放すまいと、片意地な生まれつき。それで、自由自在の大安樂が出來ぬのぢや。かく申せば錢金の事のやうなれど、攫むものはこればかりではない。器量のよいのを攫み、賢いを攫み、負けをしみを攫み、家柄を攫み、身代のよいのを攫んで、放すまいとかつぎ歩くにつて、教を聞くこともならず、樂をすることもならず、愼も出來ず、せん方なさに、癪氣抑へたり、顏しかめたり、酒飲んで紛したり、さりとては氣の毒なものでござります。壺割つてしまうてからは、何というても詮ないことぢや。身代の壺を割らぬさき、御用心が第一でござります。（柴田亨―鳩翁道話）

拔けぬこそ―道理（ナレ）

七、格　言

一、一夫耕サザレバ、天下其ノ飢ヲ受ケ、一婦織ラザレバ、天下其ノ寒ヲ受ク。（潛夫論）

一、儉ヲ學ブハ福ヲ開ク源ニシテ、奢ヲ好ムハ貧ヲ起ス兆ナリ。（魏書）

一、倉廩實チテ禮節ヲ知リ、衣食足リテ榮辱ヲ知ル。（管子）

一、利ニ臨ミテ、而ル後ニ以テ信ヲ見ルベク、財ニ臨ミテ、而ル後ニ以テ仁ヲ見ルベシ。（鶡冠子）

一、仁者ハ盛衰ヲ以テ節ヲ改メズ、義者ハ存亡ヲ以テ心ヲ易ヘズ。（烈女傳）

八、勤儉

勤と儉とは二個の意義なれども、大方は相類似せるものにて、共に修身の要件たり。勤儉は事實にあらはるゝものなれども、其の本は我が心に在りて、心中の勤儉を身の行爲に見するものなり。勤儉は啻に修身の要件たるのみならず、抑、

儉―險

啻に―のみならず

亦治家の要件なり。古人、勤儉を以て家を治むる本とせり。此の心がけなくば、家を治むること能はざるべし。何事にても、勤勉ならざるときは、其の執る所の業を全くすること能はずして、之に對する報酬を得ること能はず、家道の成立すべきやうもなかるべし。又、たとひ勤勉にして財を得とも、之を用ふるに節儉ならざるときは、之を蓄積すること能はずして、勤勉の功全からず。故に、勤と儉との二つは、相須ちて用をなすものと知るべし。

勤勉は、何時をも何事をも擇ばずして、常に心掛くべきことなれども、又、其の効果を慮らざるべからず。凡そ、事を爲すに先だち、愼思熟慮して、其の必要なると不必要なるとを分

熟―塾

別し、不必要なることには心を用ひず、有用にして成功の確實なるべきものを擇びて、これに從事するときは、勤勉の效果を得べけれども、若し徒に身心の活動にのみ一任して、輕舉妄動するが如きことあらば、其の事は勤勉に似たりとせんも、所謂徒勞にして益なきのみならず、或は失敗に陷りて、悔ゆとも及ばざることあるべし。且つ又、精神の作用にも身體の勞動にも、自然の制限あるを以て、精神も身體も、共に過勞するときは、健康に害あること固より論を待たず。此の故に、勤勉は必要なれども、休息も必要なり、睡眠も必要なり、時時出游して快樂を覺ゆるも必要なり。そは、休息も睡眠も出游も、皆勤勉を保續するに必要なればなり。はた又、勤勉時間

悔ゆとも―あるべし

に於ける勤勉も、常度を守るべくして、過度ならぬがよし。すべて事を爲すは、輟めず怠らざるやうにせば、事足りぬべし。時に由りては、非常の勤勉を要することもあるべけれども、非常の勤勉は永く繼續すべきものに非ず。譬へば人の道を行くが如し。倍道兼行するときは必ず大いに疲勞して、長き時間の休息を要するものなればなり。

儉とは節約して浪費せざることなれば、別に深遠なる意義はなきやうなれども、儉約の程度は、人々の身分に從ひて同じからず。每人每事、考慮を要することなるべし。其の身分に由り、儉約の程度を取り違へたる時は、其の儉約は儉約に非ずして、儉約以外の名を下すべきものとなるべし。貧賤な

譬へば―行くが如し

る人にして、富貴なる人の儉約を學ぶときは、其の儉約は猶奢侈たることを免れず。富貴の人にして、貧賤なる人の儉約を學ぶときは、其の儉約は全く吝嗇となるべし。此等の程度は、分別すること容易ならず。時としては分別すべからざることもあるべければ、實際に就きて斟酌すべし。要するに、「之を生ずること多く、之を食むこと寡く、之を爲すこと疾く、之を用ふること舒なり」と曰へる格言の如く、渾べて支出の收入に超過せざるやう心掛くるときは、儉約を實行するにつきて、大いなる過なかるべし。

已に奉ずる儉約は、家道の貧富に準ずること勿論なり。但し、貧者の儉約を實行するにおいて、粗衣粗食して陋屋に居

吝―呑

之を生ずる云々　大學に「生レ財有二大道一、生レ之者衆、食レ之者寡、爲レ之者疾、用レ之者舒則財恒足矣。」

住するは、固より已むを得ざることなれども、費用の許す限は、衞生の道に負かざるやう心掛くべし。衣は粗なりとも、溫暖にして垢汚なきときは、木綿も絹帛に異なることなかるべし。食は粗なりとも、烹飪宜しきを得て腐敗せざるときは、尋常の茶飯も膏粱に異なることなかるべし。家屋は時々掃除して、善く風氣を疏通せしむるときは、陋屋も廣莊大廈に異なることなかるべし。衣食住の費用を支拂ふには、少しく其の額を增すことありとも、苟も其の事衞生の道に合ひて、身體健康なるときは、其の健康なるに由りて得たる勤勉の功に由り、其の費用を償ふことを得べし。若し然らずして、儉約の濫用に由り、健康を害するが如きことあらば、何事にも

苟―筍

勤勉すること能はずして、得べき財をも得ざるのみか、或は療養の費用を支出すべきことさへありて、甚だしき不利を來すべし。故に、儉約の濫用は儉約に反對するものなり。

上に述べたる勤儉を、適當に實行するときは、漸々家道に餘裕を生じ、倉廩實つべく、衣食足るべく、禮節を知ることを得べく、榮辱を知ることを得べくして、其の修身に裨益あること、固より論を待たず。（細川潤次郎―修身要領）

裕―祐
裨―稗

九、人の一生

一、人の一生は、重荷を負うて、遠き道をゆくがごとし。急ぐべからず。

人の一生は（タトヘバ）―ゆくがごとし

一、不自由を常とおもへば不足なし。心に望おこらば、困窮したる時を思ひ出すべし。

一、堪忍は無事長久の基。いかりは敵とおもへ。

一、勝つことばかり知りて、負くることを知らざる時は、害その身にいたる。

一、おのれを責めて、人を責むるな。

一、及ばざるは、過ぎたるよりまされり。（徳川家康）

徳川家康肖像

一〇、家康公黑鶫を斥く

東照神君、まだ御幼稚の御程より、あやしくさとくおはしましてなみ〳〵の兒童の及ぶ所にあらざりし事は、いふべくもあらず。八歳にあらせられし時、尾張の織田信秀が爲に囚はれ、同國名古屋の天王坊といふにおはしましし時、熱田の神官、御徒然を慰め奉らんとて、黑鶫といへる小鳥の、よく諸鳥の音を似するを獻じければ、近侍等いと珍しきものに思ひ、めで興じけり。君御覽じて、「彼が珍禽を奉りし心得はさる事なれど、おぼしめす旨あれば、返し下さるべし」と聞え給へば、神官思の外の事にて持ち歸りぬ。

其の後、近侍に向はせられ、「この鳥はかならず己が音の劣

八歳の時　天文十八年。
織田信秀　姓は平氏、備後守と稱す。贈太政大臣信長の父。名古屋に居す。

りたるをもて、他鳥の音をまねて、その無能をおほふなるべし。おほよそ、諸鳥皆天然の音あり。黃鳥は杜鵑の語を學ばず、雲雀は鶴の聲を擬せず。己が本音をもてこそ人にも賞せられ。人も亦かくの如し。性質巧智にして萬事に能ある者は、必ず遠大の器量なきものぞ。かゝる外邊のみ飾りて眞能のなきものは、鳥獸といへども、大將の玩には備ふまじきなり」とのたまへば、承りし者ども、まだ幼くわたらせ給ひ、廣く物の心もしろしめさぬ御程に、かゝる事思ひ至らせ給ふは、行末いかなる賢明の主にならせ給はんと、あやしきまでに感じ奉りぬ。後に聞けば、黑鶫は果して本音のなき鳥なりとぞ。後年に至り、豐臣太閤の諸將を評せられしにも、「今川氏眞。

もてこそ―賞せらるれ

織田信雄など、華奢風流の事はよくなし得たれど、武門の器乏し。徳川殿は、何一つ技藝のすぐれし事はきこえざれども、將に將たる器量を備へられたり」と、感じ申されし事ありい。かにも、御幼稚の御程より、衆人に殊なる御本性にておはしましたるならんと、今さら瞻仰せらるゝ事になん。

（成島司直―徳川實記附錄）

技―枝

一一、日光の曾遊を懷ふ　その一

首を回らせば、はや十數年の昔となりぬ。余が通ひし學校は、東京大學豫備門の名を改めて、高等中學校と呼ばれたる頃なりき。學年試驗は過ぎて、六十日の暑中休暇とはなれり。

東京大學豫備門　明治十九年四月高等中學校と改稱。

山水を跋渉して、自然の文章を究めんと思へど、旅費を得る途なきをいかにせん。なつかしき故郷に母の笑顔を見たきは山々なれど、去年歸りたれば、さすがに今年もといひがたきをいかにせん。こゝに、麻布なる知る人に賴みて、その家の二階に一夏を送るべきこととなしたるに、忽ちうれしき恩命は下れり。そは舊主の若君の日光漫遊に供せよとのことなりけり。

夏服一二領いそぎとゝのへて、風雨はげしき朝、上野に向へり。若君は余より五つ六つ若く、供したる人は、余と共に三人、皆年たけたる人なり。汽車宇都宮に著きて、こゝに一宿し、翌日馬車を驅りて今市に出で、日光鉢石町の旅店に投ず。尋

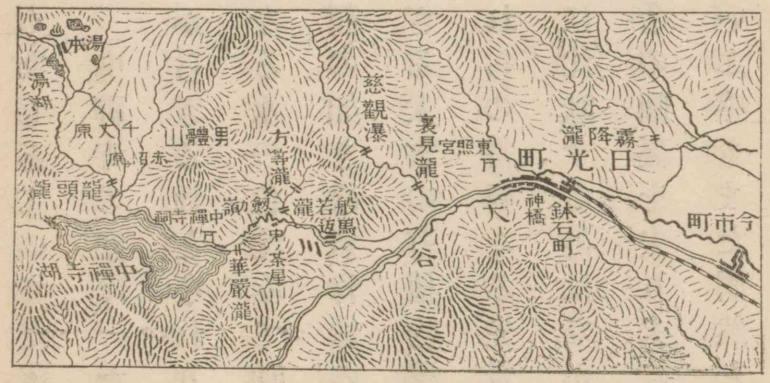
渉―陟―捗

若君　舊伊豫松山藩主久松定謨伯の男。

常一様の旅行、何の趣味もなけれど、下宿屋の外に天地あるを知らぬ余には、汽車の上等もめづらしく、旅店の上等もうれしく、馬車の借切もおもしろく、その他、立場にて泡ふく馬につめたき水を飲まするもをかしく、茶屋の老婆が缺盆に濃茶を載せきて侑むるもをかしく、興味津々として愉快限なく、はては、木の根、石の角に乘りかけて躍り上りたる馬車の、しば〳〵我等をはね落さんとするさへ面白く感ぜられたり。

次の日は東照宮に詣づ。大谷川の清流石に激して雪を噴く處、丹塗の神橋の虹の如く架せるを見、萬章の老杉、千歳の蒼苔、とこしなへに英雄の毅魄を護したる奇觀、有形に、無形

魄―魂



に、余の心を動かしたるものなきにあらねど、堂塔參差、金碧相映ずる宏莊佳麗の觀も、美術思想に乏しき余には、たゞあまりにその細工のこまかき事と、規模の小なる事とを感じたるのみ。

けふは中禪寺へとて、皆かちより行く。裏見・慈觀・方等・般若、いろ〳〵の瀧を尋ねて、中の茶屋に名高き磁石石を見て、苦しき息もつきあへず、劍が嶺を攀づ。山漸く深く、木立世の常のさまに異なり。華嚴の瀧にいたれば、今年は雨す

くなしとていまだ落ちず。中禪寺湖畔に宿りぬ。

中禪寺の湖は、一たび余が目に觸れしより後、終生忘るべからざる地となれり。黑きまで濃き山の綠、骨にとほりて靜なる水の色、沈みて動かざる空氣、さびしく光る夕日、死人の額の如き冷氣、肖像の口の如く默したる木の葉、人跡を印せざる太古の苔、植物學者の知らざる不思議の草花、およそ、これらの奇異なる光景に打たれて、余もまた周圍の萬象と共に、沈默する外はなかりき。こゝに來りて、夏といふ感はまづ余の腦裏を去り、次に、世間といふ感漸く去り、やがて自己といふ感も、また惘然としてとりとめなくなりし時、余はこの沈默せる萬象を通じて、一道の活氣を感じたり。余ははじめてこゝに、神祕的美を感得したるがごとし。これより、中禪寺湖畔に唯ひとり住みたしとの念は、絕えず余が心中に往來せり。

腦—惱

住—往

一二、日光の曾遊を懷ふ　その二

翌朝、戰場が原を橫ぎりて湯元に向ふ。路々の珍草異花數を知らず。原盡きて森に入る。千年の老木天を蔽うて、斧斤も山に入らず。狐兎近く出づるを見れば、こゝらには獵夫も住まずと覺えたり。龍頭の瀑を見つゝ、湯の湖に到る。湖に沿うてめぐれば門あり。中に十餘戶郭をなす。岸邊の水濁りて硫黃臭きは、溫泉の湧くにやあらん。某の家に投ず。湯あみせん

憶―臆

とて浴衣に手拭さげて、半町ばかり行けば、湯壺は板一枚の覆もなく、山より引きたる筧の湯あたりにこぼれて、一面に硫黄の凝り固まりたる、その臭堪へがたし。

湯の湖は中禪寺よりもさびしく、山々逼りて日に疎ければ、晝ももの凄きこゝちす。今夜は頸筋やゝ寒く覺ゆるに、蒲團ひきかづきて涼しき夢を結びしが、次の朝、下女の來て、「昨夜狼の吠えしを聞きたまはざりしか」といひぬ。

若君の東京に歸り給ひしは九月にやありけん、今はおぼろに記憶に殘りて、大方は夢のこゝちせり。若君は、その後、余等と共に、本郷の寄宿舍に住み給ひしことさへありて、いとむつまじく仕へまつりしが、御性やさしく、少しも人に驕り

いかにか―（アル）

給はず、よろづにさかしく、物のことわりをことごとにわきまへおはしければ、御行末も榮え給はんとのみ祈りしを、去年の夏、はかなくもうせさせ給ひにき。余が最後に見えたるは、明治二十八年の一月かと覺ゆ。新に建てられたる御邸に參りて、新年の喜を申しあげしに、「この頃は、いたづきはいかにか」など、ねもごろに問はせ給ふ。久しく見えざりしほどに、御有樣いたくねびまさりて、光さへ添ひ給ひしかば、いとかたじけなく覺えてまかりしに、それやがてつひの御別なりけり。君の御いたづきのよし、ほのかに聞きながら、病牀に起き臥す身は、え訪ひまつりもせで、心うき日頃を經ぬ。俄に身まかり給ひぬと聞きて、遠からず後を慕ひたてまつらんと

のみ思ひしが、御初七日の頃より、俄に熱いでて下らず。今はとあやぶみし日も、二日と過ぎ三日と過ぎて、僅に命ばかりをとりとめたれど、あらぬかたはとなりて、一歩も歩む能はず、立つことすら自由ならぬ身とはなりぬ。

十年の昔、無限の希望を負ひて山水を跋渉し、殆ど一點の苦もなくして、未來の幸運を望みし時、誰か今日の境遇あることを期せん。爾來事は志とたがひ、身は仇とかはり、惡魔は天下の不幸を擧げて、余の身にあつめつゝあり。苦痛はその全力を盡して、余を試みんとするものの如し。今や、余はこの境遇に處して、安心の地をもとむるに怠らずといへども、思うて曾遊に到れば、うたゝ心をなやましむるものなきにあらずあはれ、中禪寺の湖神は、今なほ余を待つや否や。

誰か—期せん

（正岡常規の文による）

管—菅

一三、春日局

かねて期しつる事ながら、昨日まで綾羅錦繡を纏ひし身を、荒栲衣に著更へしのみか、水汲み薪樵る業を助くるは、只一人の老僕のみ。山風寒き埴生の小家に、良人に事へ、子をはぐくみ、炊き・濯ぎに日を暮しつ、夜は微なる孤燈の下に、麻紡み絲繰りてふかすもおほく、よその見る目は厭はしけれど、更に厭はしげなる氣色もなく、まめ〳〵しく勞き勤めて、只管良人を慰めけるが、生先永き稚兒たちの、賤が子等と遊び

つれて、餘念なげなる樣を見ては、さすがに優しき母心の、「あはれ、由緒ある武士の兒と生まれながら、一生を花さかぬ埋木となしおほして、賤山かづ等と等しなみに朽ち果てさせんことの、いかにも哀しき極みにこそ」と、人知れず歎かれて、竊に手織布子の窄き袂を濕しけんも幾度ぞ。

稚き兄弟は、以前の榮華を忘れ果てて、獵師・木樵の子等に馴れむつみて、母が苦心を知るよしもなく、日々に野山に遊びくらし、見やう見まねに兎逐ひ、柴こる業さへまねびつゝ、互に伴とし往きかふ程に、あたりの兒等は、山刀・鍬・鎌の外見慣れぬ眼に、貴重なる具足・調度など見出でて、權次・太作の親親に、歸りてかくと物語れば、物識めきたる老人どもは、「さて

極みにこそ—（アレ）

兎—兎

こそ彼處の浪人殿は、たしかに京の歴々方が、流されてがな來られたに相違あるまい。兄弟の子も、母じやの仕付がよいやらして、惡戲はしながら、行儀がよいぞ」と鼻うごめかせば、「深い山には猪・鹿の種が盡きぬに、痩せても枯れても、京の歴々の果ぢやとならば、金の茶釜の一つ二つはあらうも知れぬ」と、

春日局肖像

歴—暦

いかにしてか—知りたりけん

何心なき里人の風説を、いかにしてか野伏・山賊どもの聞き知りたりけん、「さらば、彼の家には金銀もあるべく、財寶も多かるべし。よき隙あらば忍び入りて、我等が榮耀の資本にせん」と、竊に語らひつゝ覘ひ居たりとは、神ならぬ身の、固より夢にも知るよしぞなき。

羅—羅

主人稲葉正成、ふと苟且の感冒の心地して、うち臥したるが、思の外に病勢募りて、いといたう勞れ果てたり。さらでだに、かひ〴〵しくまめやかなる福女は、良人の病に罹りけるより、日夜、帶をも解かでの看病、すこしも怠なかりけるが、其の誠心や通じたりけん。今宵は、熱も稍〻低うなりしと覺えて、心地もさまで苦しからず。御身は晝夜手一つの看病に、さこそは疲れ候ひつらめ。暫しが程だにまどろみて、身體を勞り候へ」と、情ある良人の言葉、むげに否まば、なか〳〵に病の爲に惡しかりなんと思ひければ、こゝろよく「さらば、暫しが程御免たまはれ」とて、久々にて己が臥牀に入りたれど、病める良人が事、稚兒の上、生憎に心にかゝりて、夜は更けぬれど眼も合はず。

さこは—候　ひつらめ

折しも、さゆる嵐につれて、遠寺の鐘の聞ゆるを、算ふともなく數ふれば、草木も眠る丑三つなりけり。傍を見れば、頑是なき稚兒の寐顔に笑を含めるは、如何なる夢路をか辿るらん。さても、かゝる僻陬に人となりなば、いつ成り出づる期かあらんなど、又しても、こし方・行く末の事など思ひ出でられ

いつ—期か　あらん

て、眼はいよ〳〵さえまさり、思はずも太き息のみつかるゝを、病める良人に悟られじと、強ひて小夜衣引き被きて、睡れる樣を粧はんとなせる折しも、枕邊の雨戸ぐわらりと引き開けて、忽ちはら〳〵と足音させ、はや眼の前に立ち現れた る四人の黑き人影は、問はでも著き曲者なり。餘りの意外に、驚きて跳ね起きたる福女、「何ものぞ」と聲かくれば、「問はるゝ迄もなし。夜陰の稼をなす者なり。今宵夜更けて音づれたるも、此の家に蓄へたる金銀財寶のあらん限を申しうけんとてなれば、命惜しくば、殘らず出してわれ等に捧げよ。否まば病みほうけたる此の家の主人より血祭せん」と、簀子荒らかに蹈み鳴らして、息まきかゝるに、福女は露ばかりも慌て騷

宵—霄

げる氣色なく、「さる儀ならば無用なり。主人の病めるを覘ひて、女と侮り、入り込みたる野伏の愚人ども、そも、我を誰とか思へる。明智殿の御内に、鬼と呼ばれし齋藤内藏助利三が息女、今は稻葉佐渡守正成が室と知らざるこそ愚なれ。汝等如き盜賊に、塵一つだに取らすべきかは。無禮の擧動、そこ動くな」といひも終らず、牀に懸けたる紀正恆が鍛へに鍛へし業物の大太刀おつとり、矢庭に二人を斬つて捨て、尙も漏さじと斬りたつるに、殘れる二人は慌て惑うて、逸足出して逃げ走るを、福女は追うて庭にまで出でたりしかど、如法の闇夜に、何方さして逃げ失せけん、蹤追ひかけん術なきのみか、病める人の上、稚兒の上、はた、いたくも心にかゝれば、さまでは

侮—悔

明智殿　日向守光秀。

とて取つて返しぬ。このこと、誰いふとなく風評に上りて、「さては、心ざまの雄々しく賢しきのみにはあらで、武藝また世の人に勝れておはしけり。かへす〴〵もいみじき女性よ」とて、人々語り繼ぎければ、盜賊ども聞き怖ぢして、その後は隙を窺ふこともあらずなりぬ。

福女とは誰ぞ。讀む人ははや推せるならん。こはこれ、婦女の鑑と世に知られし、德川三代將軍家光の乳母春日局その人なりけり。（岸上操―春日局）

こはこれ―その人なりけり

若君　竹千代家光。

一四、松平信綱の幼時

或時、若君、大殿の御寢殿の屋の軒端に、雀の巣くひ子產みたりしを、こなたより御覽じて、欲しがらせ給ひ、「長四郎とりて參らせよ」とあり。長四郎十一歳の時なれば、いかにも協ふまじと辭しければ、「晝は驚きて飛び去ることありなん。巣くひし處よく見おきて、日暮れて、此方の屋の軒に梯さして登り、彼處に忍び行きて取るべし。大人は身重く、足音もしなん。たゞ汝取りて參らせよ」と、侍ふ人々の敎へしかば、力なく、日暮れぬれば、こなたの屋よりして、傳ひ〳〵して行きて、既に御寢殿の軒に至りて取らんとせしに、蹈み損じて御坪の內へどうと墜つ。

將軍家御刀取つて、障子引きあけ給へば、御臺所燈火とつて出でさせ給ひ、御覽ずるに長四郎にてありけり。將軍家不

大殿　德川二代將軍秀忠。

長四郎　松平信綱の幼名。

推―堆

思議に思し召されて、「汝は何しに爰には來りぬるぞ」と御尋ありしに、「今日の書、この御殿の屋の軒端に、雀の子産みたるを遙に見て、あまり欲しさに參りて候」と申す。將軍家、「いやいや己が心にはあらじ。誰が教へけるぞ」と、いろ〳〵に御推問あれども、幾度も、はじめ申しし言葉に變らず。「おのれ、事の由ありのまゝに申さで爭ひぬるこそ、年頃にも似ぬ不敵なれ」と仰せられて、大きなる袋の中におし入れて、口を御手づから封じ給ひ、柱にかけさせ給ひ、「事の由ありのまゝに申さざらんほどは、いつまでもかくて候へ」と仰せけれども、なほ爭ひ申すこと初のごとし。

夜既に明けて、常の御座に著き給ふ。御臺所は夙く心得させ給ひて、彼が幼き心にて、身の悲しさを顧みず、竹千代君の仰なりと申さざることを深く感じ給ひて、御手づから袋の縫目ほころばし給ひ、女房達に仰せて、朝がれひ召して、「これ食べよ」とて賜はせて、又、御手づから元の如くに縫はせ給ひて置かせ給ふ。

たらんには―候はん

畫の程、將軍家入らせ給ひ、又御推問ありしかど、終に言葉をかへず。御臺所御わび事ありしかば、さらば向後の事を慎むべきよし仰せて、御許あり。將軍家、御臺所に向はせ給ひ、「彼が今の心にて生ひ立ちたらんには、竹千代殿の爲には、雙なき忠臣にて候はんものぞ」と、殊の外悅ばせ給ひき。

（新井君美―藩翰譜）

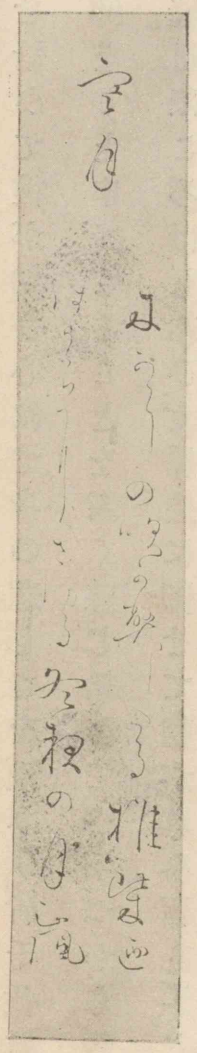
一五、山吹の花

落合直文

歌のふみ二ゆきこまれたる散りて
あるしそとやまぶきの花

高崎正風

うち笑みてひさにたもひよるかなりさハ
わのるの人のかたらひさきあり



小出粲

何ごとも殺あらせじと思ふまで
ちひさくなるぬかりたまも

佐々木信綱

瀧をおちる弾指枝本をあらうに
ぬきねをのるて靜寂ふるも

尾上八郎

ちさ紅なる投るなたるなり
やふるておのむ和の歌の反古

一六、文字

我が國にて普通に用ひる文字には、漢字と和字と假名との三種がある。

漢字は支那から傳はつたものでその字體には、古文・篆書・隷書・楷書・行書・草書の六體があるが、普通、印刷などに用ひるのは楷書である。然るに、等しく楷書といふ中にも、古文・篆・隷より直接に變化し來つた、正體の楷書の外に、いはゆる俗字、及び略字と稱するものがある。例へば、閒・鄰・敕・貏・攜・牀・脚は正體で、間・隣・勅・窮・携・床・脚はその俗字、邊・澤・聲・亂・實・體・當は正體で、辺・沢・声・乱・実・躰・当はその略字である。俗字や略字も、既に久しく慣用せられたものは、なまじひに奇古な正體よりも、實用上便利であるが、古書などを讀む爲には、その正體をも知つておく必要がある。

古文	篆書	隷書	楷書	行書	草書
上	上	上	上	上	上
下	下	下	下	下	下
左	左	左	左	左	左
右	右	右	右	右	右

楷—階

その俗字や略字は、勿論支那の文字の稍〻變化したものであるが、和字は全く日本で作つたものである。働・凧・凪・峠・躾・軈・込・辻などのやうに、漢字に倣つて、新に字形を作つたもの、伽・咄・掟・柾・椿・沖・萩などのやうに、漢字にもこの通りの字形はあるが、全く別の意味に用ひたもの、抔・枠・詫・溶などのやうに、漢字の一部分を改作して、他の意味に用ひたもの、および、腺・哩・吋・糎・瓩などのやうに、西洋の醫學や數學の入つて來てから新に作つたもの、これ等は皆和字である。これ亦、一概に俗字

概—慨

味—味

として排斥すべきではない。

假名も、亦漢字から出たもので、大凡、奈良朝の末から平安朝の前半にかけて、一般に用ひるに至つたものである。平假名は漢字の草體をさらに簡易にしたもの、片假名は漢字の偏・旁・冠などを取つて作つたものであるが、これらは唯音を表すのみで、意味を表すことはない。これが假名の特色で、その性質上、漢字や和字よりは、寧ろ羅馬字に近いのである。

以上三種類の文字の中で、假名は音を表すのみである。和字は概して訓のみで、音はない。然るに、漢字には音と訓と二様の讀み方があつて、その音にも訓にも様々の種類がある。

まづ音に就いていふと、行狀・行李・行燈、經文・經書・看經、京都・

儒—儒

京師・南京の行・經・京の如きは、それ〴〵異なつた音で讀まねばならぬ。その行狀・經文・京都の類は、いはゆる吳音で、日本に最もはやく傳はつた爲に、佛經に關する語や普通語に、頗る廣く用ひられてゐる。行李・經書・京師の類は、所謂漢音で、唐の文化が盛んに輸入せられた時代に、朝廷の奬勵によつて流布したものであつて、儒書は多く之を用ひて讀むことになつてゐる。行燈・看經・南京の類は、宋以後に傳はつた音で、唐音と稱してゐるが、唐時代の音といふ事ではなくて、唯唐土の音といふ意である。但し、この種類の音は、極めて稀に用ひられるのみである。その他、北京・廣東・上海などの如く、現代の支那音を用ひることもあるが、これは、唯本邦と交通頻繁な土

苦—苦—若

地の名などに、僅に用ひられるのみである。

この唐音や現代の支那音も、かの地の發音に比べると、既に幾分か訛つてゐるのである。吳音は支那の南方の音、漢音は支那の北方の音を傳へたものであるが、原音のまゝではなくて、餘程變化してゐるのである。

訓にも種々の種類がある。漢字一字に國訓を附したもの、例へば、日・月・山・川・草・木の類、漢字二字の熟語に國訓を附したもの、例へば、從弟・伯母・海苔・所以の類、或は、これに外來語の訓を附した隧道・燐木・喞筒・麪包の類、これ等は皆、漢字本來の意義に從つて訓讀するものであるから、正訓といふ。然るに、子・丑・寅・卯・辰・巳の如き、草臥・七夕・團扇・流石に・五月蠅しの如き訓

疑—款

は、漢字本來の意義とは多少異なつてゐるが、相似たところがあるから、これを當てたのであつて、かゝる種類のものを意訓といふ。

漢字には、以上の如く種々な讀み方がある。されば、今、或漢字を讀む時に、これを音讀すべきか、訓讀すべきか、或は、如何なる音、如何なる訓にて讀むべきか、頗る疑はしい場合もないではないが、大抵は、國語の習慣や、前後の關係や、送假名等によつて判定することが出來る。その中で、漢語で出來た熟字は、音讀する時は二字ともに音讀し、訓讀する時は二字ともに訓讀するのが正則である。たゞし、國語と漢語と連合して熟字となる時は、敷地・奥行の如く、音訓を交へて讀むこと

がある。又、正則ではないが、重箱・合羽・團子・出立のやうに、音の下に訓を連ねて讀むこともあり、湯桶・小僧・身分のやうに、訓の下に音を連ねて讀むこともある。

これを要するに、言語・文字のことは、一に習慣によつて定まるもので、久しき習慣となつたものは、正則でないものでも、亦、これに從はねばならぬ。（佐々政一）

一七、女流の俳句

徳川時代には、女流にして俳句を善くせしもの少なからざりき。園女・すて女・千代女・智月・秋色・花讃などあり。皆同じ頃の人なり。

園女　伊勢の松阪の人。芭蕉の門下。享保十一年歿す。年七十四。

汗―汗　智月　近江大津の人。芭蕉の門人。沒年不詳。

園女の句に、

忙しや、すみれを摘めば土筆。

春の野遊のさま見るやうなり。

鼻紙の間にしぼむ菫菜かな。

摘み取りし菫菜の花を程經て見出でて、萎れたるをも捨てかぬる女心見えてしをらし。

衣がへ、みづから織らぬ罪ふかし。

母の恩の深きを思ふ心根の殊勝なるを見るべし。

負うた子に髪なぶらるゝ暑さ哉。

汗の流るゝ暑き日のさま、思ひ遣らるゝなり。

又、智月の句に、

鶯に、手もとやすめむ、流しもと。

やさしき娘心見えて愛らしからずや。

朝顔の咲くや、親にも叱られず。

今朝は幾つか咲き出でたるなどと、早起するも花ゆゑ、叱られぬも花ゆゑとなり。

幾つか―出でたる

すて女、

雪の朝、二の字二の字の下駄の跡。

これは六歳の時の句なりとぞ。

すて女　丹波の人。北村季吟の門下。元祿十一年歿す。年六十五。

秋色の句に、

雉子の尾の優しうさはる菫菜哉。

とは、雉子の姿の優しく美しき風情を寫せるなるべし。

秋色　江戸の人。其角の門人。享保十年歿す。

花讃、

簪よ櫛よ、さて世は暑いこと。

うるさきは髪飾なり。洗髪などにて涼まば、いかにとの心なるべし。

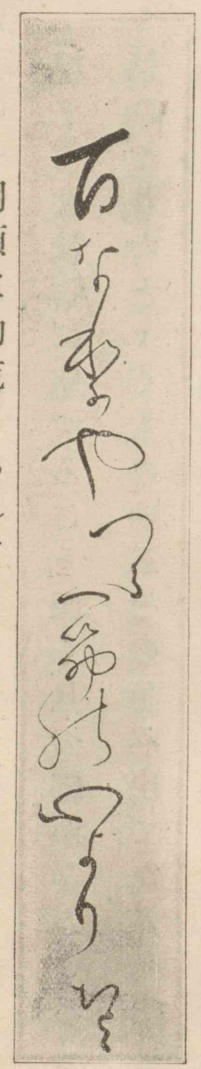
花讃　傳未詳

涼まばいかに―（涼シカラン）

子を寢せた間を抜け出でて涼み哉。

母とならではえ知らぬ涼しさなるべし。

なほ千代女の句を三つ四つ擧ぐれば、



朝顔に釣瓶とられてもらひみづ

鶯や、またいひなほしいひなほし。

千代女　加賀の人。幼より俳諧を好み、又畫をよくす。安永四年歿す、年七十四。

ころびても笑うてばかり、雛かな。

などいづれもめでたし。

總じて女は物に感ずること深く、且つ細かきところまでも思ひやりのとゞくものゆゑ、その詠み出でたる句も、またあはれ深し。（坪内雄藏―國語讀本）

相馬の中村　磐城國相馬郡中村町。

一八、松川浦

相馬の中村を立ちて、松が浦へと志す。松が浦は、今、松川浦と呼ぶ。中村の市中を流るゝ宇多川の末は、卽ちこの松が浦に入るなり。行くこと一里ばかりにして、浦のほとりに出づ。水莖山といふ小山あり。その上にさゝやかなる觀音堂見ゆ。

普陀落山　紀伊國東牟婁郡那智村大字濱之宮にあり。千手觀音を安んず。

脇―協

さらば―（物セン）

まづこの山に上りて、心靜に四方のありさまを見るに、背には大洋を負ひ、脇には浦を擁したれば、眺望に富むこと大方ならず。遠く松が浦一帶の明媚の景色を眸中に收むるはいふも更なり、近く太平洋の濤凄じく寄せては返る、飛鳥の水門を脚下に見るなど、多く得難き趣あり。堂後は幾弓の地も無くして、懸崖たゞちに水に臨めり。その樣畫ける南海普陀落山の如く、まことに危きが上にも危きは、斷えず潮汐の岸を嚙むが爲なるべし。「いざ、これより船を僦ひて、松が浦の波平かに水淸らかなるが中を、彼方此方と乘りまはし、飽くまで探勝の興を縱にせん」と、同行のもののいふがまゝに、さらばとばかり、山を下りて船を求む。幸に親子づれの漁夫の、投

網—綱
苫—苔
何者の—居るやらん

網をもて漁りあるけるに遇ひしかば、喚び止めてそれに乘り、一葦のゆくところに任せて、半白の老夫、腰簑せる若者と共に、我等もまた終に畫中の人となり了んぬ。

船漸く進みゆく前途に當りて、ふと見れば、四阿造の小さき家の、水上に泛べるが如く建てられたるもの、甲處乙處にあり。雨をも風をも、纔に藁・苫のたぐひにて防ぐのみとおぼしきしつらひにて、その大いさ疊二ひらほどもあるべきか、まことに膝を容るゝに足るばかりと見ゆ。いかなれば、遠く陸を離れて寂しき浦の波の上に、かゝるいぶせき廬を結びて、何者の籠り居るやらん。うち見たるところは、世をも忘れたるげに物さびて、風雅を極めたりと覺ゆれど、人ありやは

いかで—設くべき
獲—穫

た人なしや。人あらば往來すべき船の見えぬも、いぶかしき限なり。水の上に庫など設くべきやうは無けれど、若しくは物を納るゝ爲の小屋などにやと、深く怪しみて問ひ質せば、老いたるは、若きと顏見合はせてうち笑ひつ、「知り給はねば疑ひ給ふも道理なれど、いかで水の上に庫など設くべき。正しく人の居るべきために結びたる假廬なり。土地の習にて、かゝるものを幾個となく浦の中の甲處乙處に建ておき、人その中に潛みて、物音もせさせず靜まり居り、魚の心長閑に近傍を過ぎ行くころを候ひて、豫て伏せ置ける四手網を引き起し、何くれとなく、數々の魚を獲て、はかなき賤のたづきとはするなり。されば、見給へ、網を起す時に當りて力とする

杭—抗

孤—狐

いかに—風情か—あるらん

ところの杭の立たぬもなし。往來すべき船の見えぬを訝り給ふはさる事ながら、これを守るもの、二時ばかりにかはりあふ定なれば、船はいつも陸よりする人を載せて來り、小屋よりする者を載せて去り、小屋のほとりには止まること無し。小屋をば土地の言葉にて『あじごや』と申すなり。秋も名殘となりて、潮煙吹く風の夜半、特更に冴ゆる折など、小屋の中に在りて、獨居の憂さを慰むべき歌だにえ唱はで、空しく陸よりの船を待ち詫ぶる情など、都の人は夢にも知り給はぬなるべし」といふ。「あら、おもしろのあじごやや、浮世の塵の中ならぬ、水の上の孤屋の、月に潮の湧く夕、時鳥に雨のそゝぐ曉などは、いかに氣も澄み心もゆくばかりの風情かあるらん。あはれ、わが身に暇多からば、一夜はあじごやにまろ寢の夢を結びても見ましものを」と、うち興ず。

十二本松の名もをかしき、ところ〴〵に松の大樹の立てる岸邊を行くかとすれば、はなれ島・沖が島などいふを眼の前に見る。島はいと小さけれど、幾歳の水波に晒されたれば、姿も枯び、色も白みて、鏡の如き水のはてに浮びたるさま、畫にかける龍宮城を望むが如し。文字が島に至りて、船を蘆荻の間に繫ぎ捨て、陸に上りて、さて、浦のさまを見渡すに、折から日は傾きかゝりて、雲の隙洩る光の、一入強く照りわたれば、黃金溶けて流るゝ漣漪、人の眼を燒くばかりに耀き、近くは沖が島より、遠くは松川・千島・水莖山・清助森・十二本松等起

荻—萩

伏出入して、一幅の大畫幅をなし、漁船の緩く往來する、あじごやの閑に立てる、裸にして草の衣だに纏はぬ小嶼、岸老いて松の翠の蓋を張れる大島、いづれ詩歌の材、丹青の料たらぬはなし。昔はこゝに相馬侯の別業ありきといふも、げにも と點頭かれて、風光の美は、人の古今を問はず、誰が眼にも同じやうに映るものと知りぬ。

網などうたせながら、暮るゝ頃松川に歸り、月を蹈んで原釜に至る。（幸田成行―露伴叢書）

點―默―黜

一九、我が故郷

我が故郷は九州のほゞ眞中で、海に遠い、幅一里長さ三里ほどの、もつさうの底見たやうな谷合である。どちらを向いても屏風を立て廻したやうな雜木山で、その上から、春は青くなり、冬は白くなる遠山がちよい〳〵顔を出して居る。最も高いのは、東に一つ孤立して居る高鞍山で、雨が降る前には、必ずこの山に雲が懸る。この山が見え出すと、どんなに降つて居ても、やがては晴れる。雲が懸るのも、日が射すのも、まづこの山が第一で、いはば我が故郷の氣象臺である。四方の山から滾々と湧き出づる清水は相集まつて、村人の所謂大川・小川の二流となり、十分に谷を潤して居る。谷は一面の田、その田の間々に、此處に村が一むれ、彼處に家が二三十。北の隅にあるのが妻籠（つまごめ）の里といつて、町といへば町、戸數は千に

も足らないが、まづこの谷の都である。

取り出していふ程でもないが、今も忘れ難く思ふのは、水の清さと稻の美しさとである。たしか東京に積み出して鮨米にすると聞いて居る。その稻葉のつや〳〵と青んで、延び延びと立ち揃つた所は、都人士に見せもしたい。實に見せたい、蛙の聲をふみ分けて、一村總出の田植時、早少女の白手拭がひらり〳〵と風に靡いて、畦から畦に田植歌の流れるころの賑やかさを。それから又、金をも溶すばかりの炎天の日の夕立雨は、都人士の夢にも見ることの出來ぬ壯觀である。「暑い、堪らぬ」といふ下から、ごろ〳〵鳴り出す、突然大氣が冷える、ふと見ると、黑雲がもう高鞍山を七分通り呑んで居る。

それがインキの散るやうに、ずうつと滿天に浸み擴がつて來る。稻妻がぴかり、夥しい雷鳴二つ三つ。冷たい風がさつと吹いて來ると、軈て大粒の雨がぽつり。田中に下り立つて居た太郎作が、まだ半町と逃げ延びぬうちに、鳴る、光る、降る、吹く。世の終かと思ふ程の荒れやう、と思へば、忽ちすうつと明るくなる。笠おつ取つて出て見る頃は、夕立はもう五六町逃げ延びて、隣村はさながら簾越しのやうになつて居る。大空は眞二つに分れて、東の方はまだ眞暗で、雷樣がごろ〳〵太鼓を敲いて居るが、西の方はあか〳〵と夕日がさして、高鞍山のてつぺんと思ふあたりから谷へかけて、すばらしい虹が立つて居る。嗚呼、涼しい。先程まで萎えしをれて居つた稻

が、一瞬の間に眼も醒める程あを〳〵となつて、一二寸も伸びたやうに、どこを見てもざわ〳〵とさゞめいては霞を搖り飜して居る。獨り泡だつ田の水はどく〳〵溢れて、小鮒や鰌がやたらに畔路に跳ねて居る。

蟲送も濟んで、初秋の風そよ〳〵と稻葉に音づれる頃は、夜は露より明けて、朝日に匂ふ稻の花の美しさ。二百十日・二百二十日の厄日も事なく過ぎて、青疊敷いた谷間が、いつしか金色に照つて、此處にもざわ〳〵、其處にもざく〳〵。收穫のさかりになれば、たれを訪ねても家には居ない、皆田に出て居る。時雨が降り出すと、夜晩くまで籾ずりの音が聞えて、高鞍山に雪が見える頃は、つい先月まで田にあつた稻が、もう綺麗な米俵になつて、倉や納屋に積まれて、農夫は新酒に舌鼓打つて豐年を祝ふのである。

それから水、嗚呼、あんな水が縱横に市中を流れて居たら、東京もどんなによからう。我が故郷では、殆ど井戸の用なしといつてもよい位。四方の山から滾々として絶えず湧き出づる清水は、縱横に小さな流をなして、鮎はしる二つの川に落ち合ふ。何處に行つても潺々淙々の音が聞える。夏の月夜など、じつと聞いて居ると、實に好い氣持がする。京都は水がよいといふが、自分は京都よりもよいと思ふ。馬が飲む道傍の小溝の水も、女が洗濯する家の前の流も、乃至水車がかき雜ぜる田川の水も、實に氷と冷たく、玉と澄んで居る。今でも、

夏になると、自分は一入故郷を偲ぶのである。

（徳富蘆花―思出の記による）

二〇、植物と氣象との關係　その一

植物の景觀と自然の氣象との間には、おのづからなる關係ありて、互に相依り相助けて、以てこの宇宙の美を現出するなり。故に、晴・雨・雷・風・雲・霧・露・月等の、さまゞゝの氣象に對する植物の景觀に注意すれば、まことにおもしろき趣あるものなり。

春の日の霞たなびきたる中に、山櫻の咲き亂れたるは、まことに趣深きものにして、その調和の美いふべからず。今、假

恐らくは―能はざるべし

にこの櫻花をして澄み渡れる秋の空に開かしめば、いかなるべきか。恐らくは、その優美・豔麗なる特性は、十が一をも現ずること能はざるべし。又、春の野の霞に罩められて、をち方の山々は淡き紫色ににほひ、紫雲英・蒲公英などの一面に咲き亂れたる中に、蝶・蜂などのおとづれ來て、心ちよげに飛び狂へる光景は、よく花曇の日和と和して、まことに長閑なる心地せらる。

人をして―感ぜしむ

新緑の候となれば、快晴の日にも、空氣は水分を含みて、何となう夕立の雲起り來べきかと思はるゝものなるが、その青き空に、綠滴らんばかりなる竹樹の枝さし交したるは、その配合ことに妙にして、人をしてそゞろに夏の面白きを感

晴—晴
瓣—辨

ぜしむ。

やがて、晩秋の節となれば、空氣きよらかになりて、遠きあたりまで見やらるゝに、楓樹・公孫樹などの霜に色づきたるが、夕日に映えたるさまなど、また、いひ難き趣あり。冬の末より春のはじめにかけては、寒さ嚴しき淸曉に、梅・臘梅などの、雪に傲りていち早く咲き出でたるは、氣高く心ちよきものなり。

雨のおもしろきは、燕子花・花菖蒲などの咲き出づる梅雨の頃なるべし。降るかとすれば晴れ、晴るゝかと思へばまた降り出でて、その度毎に、花の豔麗を增すなど、人をして限なき一種の幽情を催さしむ。殊に、これらの植物の花瓣と葉と

膚—慮
そは—なければなり

は、おのづから雨を防ぐやうに作られたるを以て、雨滴はそのうへに、小さき玉水となりてとゞまれるが、その美しさ、まことに形容し得べくもあらず。

驟雨などの烈しき雨にも、また、おのづからなる植物の配合はあるなり。そは、多く、雨滋き地に生育せる植物、又は、さる地より移し植ゑられたる植物にして、かの梧桐の如きはその一例なり。その直立して膚靑き幹、その淺く切れ込みたる廣き葉の、一は新に洗はれて、一しほ鮮綠の色を增し、一はばらく〳〵と音立てて、その葉末より餘滴をしたゝらする光景は、よく、この植物の、かゝる急雨に適せるを見るべし。

蓮の葉もまた雨を受くるに適せるものなり。そは、葉の表

に、一面に天鵞絨のやうなるこまかき突起ありて、その間に空氣を含むをもて、雨に遭ふとも、少しも濡るゝことなければなり。かくて、又、その空氣はよく光線を反射するを以て、葉の上にとゞまれる玉水をして、一種銀色の光を放たしむ。芋の葉も、殆どこれに等しき構造をなせり。

秋雨に就きて聯想せらるゝ植物は少なからざれど、まづ人の心をひくは芭蕉なるべきか。秋も末になりて、その葉の破れ、筋の現れて、見るからはかなげなるに、寂しき雨のうち灑ぎたる、人をして殆ど蕭條の氣に堪へざらしめんとす。

松は特に雨に適せる植物にはあらねど、その雨に沾ひて、細き葉の束ねたるやうになりて、少しうつむきつゝ雨滴を

蕭—簫

滴らするさまは、また、しめやかなる趣なきにあらず。

二一、植物と氣象との關係 その二

雪は寒國のものなれば、これに適するは寒地の植物なれど、暖地の植物も、またこれに遭ひて、おもしろき景色を見するものあり。かの常磐木の類、例へば樅・杉・松などの類の濃綠なる葉の、純白なる積雪の下より露れたる、又、南天燭の赤き實のその間にほの見えたる、共に色彩の配合上、見棄て難き美觀なり。又、松の、その魁偉なる枝もて、竹の、そのしなやかなる枝もて、積雪の重みに堪へたるさまは、一は豪壯、一は清楚なる趣ありて、共に賞すべし。

磐—盤

風の趣もまた棄て難し。そよ吹く風の草木をわたりて、優しき樂を奏する、木枯の落葉を吹き捲きて、凄じき音をたつる、共に興なからずやは。ことに、野邊の芒・水邊の蘆の秋風に戰げる趣は、秋の風物の最もあはれ深きものなるべし。また、秋の夕、澄みわたれる空に、一點の雲もなく、さしたる風の渡るとも見えぬに、樹々の梢のそよ〳〵とうち戰ぐは、いひ知らぬあはれの籠るものなり。

松濤・松籟などいふも、また一しほの趣あるものなり。平地は風吹くとも覺えぬに、松の梢のひとり美妙なる樂を奏し出づるは、まことに何の音ぞと怪しまる。古來幾度か詩人の吟詠に上りつらん。

ものなれど―なきにあらず

雲は四時を分かずをかしきものなり。春の山にたなびきて花かと見紛ふ白雲、夏の空に奇しく崩れかゝれる雲の峯、秋の野に飛び迷ふ薄雲、いづれも皆とり〴〵のあはれ籠れり。又、冬の日、かの木曾・日光あたりの樅・栂・落葉松などの生ひ茂れる高山を深く立ちこめたる凍雲は、まことによく幽邃の趣をあらはすものなり。

霧は高原に多きものなれど、平地・平原にもまた全くなきにあらず。夏の頃、朝霧の立ちたる時、杉・樅などの常磐木の見えがくれするさま、田・沼・湖水などの一面に罩められたるさま、亦一種の風趣あり。

露は夏・秋に下るものにて、朝夙く起き出でて、草むらの間

を行かば、その葉ごとに、美しくして恰も白玉の如くなるを見んこと、に稻・蘆などのやうなる禾本科の植物、又、欵冬などの葉の緣なる露は、規則正しく置けるを以て、その觀頗る美なり。

月は季節によりて、その觀一ならず。春の夜は曇りがちにて、朧月多し。世には、この朧月に夜櫻を配して、得難き美景なりといふものもあれど、かの朝日に匂ふ山櫻の、優美にして壯快なるには比すべくもあらず。夏の月はこれに反して、頗る快活なるものなり。ことに雨過ぎし木の葉・草の葉に映じたる月光は、いひがたき涼味を生ぜしむ。中秋の滿月は空にさえて、その光誠に常と異なるは、よく人の知る所なり。

朝日に匂ふ　本居宣長の歌に「敷島の大和心を人とはば朝日に匂ふ山櫻花」。

月夜に適せる植物はあまり多からず。かの暗香の浮動を賞すべしといひならはせる梅なども、その花の美觀は、なほ晝間を以て勝れりとす。されど、一面よりいへば、とりいでてこれといふべき好配合のなきは、たま〳〵以て、適くとしてよからざるなき月の美質を示せるものにして、松の月・柳の月・梧桐の月、皆とり〴〵のあはれを具へざるはなく、さては、秋野の滿月・夏山の曉月など、いづれも他に求め難き景致を具ふるにあらずや。（三好學―植物生態美觀による）

暗香の浮動　宋の林逋の梅の詩に「疎影横斜水淸淺、暗香浮動月黃昏」。

柳―抑

二二、四季の月（石川依平）

梅　咲　く　園　に　　霞　み　つ　ゝ、

月こそ―ひかりなれ

峯のさくらの
曇りもはてぬ
月こそ、春の
まだしきほどの
はつ音待つ夜の
なれて涼しき
閨の戸さゝで
桐の葉わけに
秋とほのめく

花ぐもり、
おぼろ夜の
ひかりなれ。」
ほとゝぎす、
まくらより、
月かげに、
あかすなり。」
影見えて、
ゆふべより、

いく夜か―ながめけむ

など―思ふべき

たちまち居まち、
いく夜か月を
木の葉ふりしく
時雨にくもり、
雪に照りそふ
などすさまじと

待ちとりて、
ながめけむ。」
山の端の、
霜にさえ、
月かげを、
思ふべき。」

二三、ナイチンゲール その一

歐人の公園地とも云ふ可き伊太利の風光明媚なる一都府を、フロレンスと稱す。西暦千八百二十年、富裕なる英國の

一紳士、夫人と共に遊歷の途次、こゝにしばらく逗留して、一女兒を擧げたり。處の名をそのまゝに、フロレンス-ナイチンゲールと名づけぬ。これなん歷史に一光彩を添へて、萬人に祝せらるゝ名なりける。

これなん―名なりける

フロレンス女史は、豐なる田舍紳士の家庭に、何の心配もなく生ひ立ち、古文辭・數學・語學等、その頃の女子としては、周到の教育を受けたり。天性慈悲の心深く、六七歳の頃より、人形の介抱、犬猫の療治等を遊戯とし、病人・怪我人を介抱するを樂としたりき。

さる程に、女史は遍く世の苦痛者・疾病者の友たらんと志して、先づ英國各所の病院を訪ひ、千八百四十四年より、殆ど十年の久しき、資を齎して歐洲諸國を歷遊し、各國の病院及び看護制度を仔細に觀察し、或は自ら看護婦となりて、熱心に看護の法を實習し、或は倫敦の一病院を整理せしが如き、蓋し、女史が實力を養成して他日の準備をなせるは、全くこの時にあり。

齎―齋

格―恪

ナイチンゲール肖像

女史、かつて人に書を與へて曰はく、「すべて一の事業に就かんと欲する妙齡の淑女諸君に向つて一言を述べん。男子が其の事業の準備を爲す如く、諸君も亦まづ其の事業を爲さん資格を作れ。さらでは、

事業を爲し得んとおもふなかれ。また、諸君、もし男子の事業を爲さんと欲せば、女子の往々に陷り易き不精密・荏弱等の弊を去れ。諸君自ら男子の爲すが如く、事務の法則に從へ。諸君はこれによりて、初めて事業を成功せしむるを得ん」と。この數句、實に女史の精神を表し得て明白なり。ある人嘗て女史を評していはく、「彼の女は、天鵝絨の聲と、鋼鐵の意志とを有する人なり」と。蓋し、女史は、十年の準備、まづ其の資格を作り、事務的伎倆及び鋼鐵の意志、以て其の成功を致ししものなり。

揚—楊

準備の後に實行あり。十年の修練、今や大いに發揚すべき時は來りぬ。千八百五十四年、東歐にクリム戰爭起れり。

此の戰爭の初に、英佛の聯合軍は、著しき武勇の働せしが、運送不便・監督不行屆の爲に糧食缺乏し、加ふるに陣營の衞生足らず、且つ、適當なる病院・看護者なきが爲に、健康なる者は病み、病みたる者は死し、陣中は一大病窟となりぬ。

歷史の記す所によれば、クリム戰爭の死亡者中、戰死せし者は極めて少數にして、殆ど十中の九は、實に病に斃れたる者なり。而して、初七個月間に死亡せる兵士の數は實に夥しく、若し此の割合にて進まば、征討の全軍は、一年半にして死に盡すべき有樣なりき。これ等の事實英國に聞ゆるや、國民の悲歎限なく、皆東方の天を望み、涙を流し胸を拍ちて救濟を叫べり。

皆—叫べり

是において、女史は時の陸軍大臣に一書を寄せて、自らクリムに赴き、病院整理・衛生監督の任に當らんことを申し出でぬ。

心は心といかに相響くものぞ。女史が陸軍大臣に寄せし書は、大臣が女史にクリム出張を依頼せる書と、恰も中途にて行き逢ひ、女史はこゝに其の志望に背かず、クリムに於ける衛生・病院に關する全權を與へられぬ。女史は直に四十二名の篤志の婦人と共に、白帽白衣、故國に別れ、クリムに向ひて出發せり。

直に—出發せり

二四、ナイチンゲール　その二

女史がクリムに著するや、恰も女史の決心と手練とを試さん爲なるかの如く、インケルマンの大戰爭、その明日を以て行はれ、多くの月を經ざる閒に、女史の保管の下に來りし傷病者の數は、實に一萬の夥しきに及べり。此の莫大の患者を引き受けし女史の勞、果して如何。女史は、實に其の身體の虛弱なるにも關せず、柔和なる仁德の光と、鋼鐵の如く堅固なる意志の力とを以つて、あらゆる困難と戰ひ、呻吟・怒罵・呪詛・汚穢・饑餓・惡疫を以つて充ち滿ちたる戰地病院は、月を出でずして、淸潔にして秩序整然たるに至れり。

あゝ、光明の入る所、暗黑も亦容を變ず。「彼の女の來りしより、病院は靜肅淸潔なること、聖會堂の如くなりぬ」と。これ、一

怒—恕
容—客

拒—距

病兵の人に語りし所なり。時としては、兵士外科の手術を受くるを拒みて、いひ爭ふ事あれども、女史來つて其の牀邊に立ち、溫言以て諭すこと二三語、すなはち彼は默して其の手術を甘受す。「吾等は彼の女の過ぎ行く姿をだに見れば、滿足して枕に就けり」と。これ、他の一傷兵の、陸軍大臣に語りし所なり。

かくて、千八百五十六年七月、英軍土耳其を引き拂ふまで、女史の戰地にある、殆ど二年に近かりき。

女史の英國に歸るや、上女皇より下勞役者に至るまで、爭うて大いにこれを歡迎せり。女皇は感謝の手書と、金剛石を嵌せる十字架とを賜ひ、土耳其帝も、亦、寶石を鏤めたる腕環

捐—損

を贈り、有志者は義捐金五萬圓を醵めてこれを贈れり。その他、有志者より寄せたる物品・謝狀は、實に山をなせり。而して、女史は此の金を以て、聖トーマス其の他の病院に寄附して、看護婦養成の資に供しぬ。多くの辛勞を以て、多くの生命を救ひたる女史は、爲に痛く健康を害し、且つ、女史の性質、元來退隱を好めるが故に、爾來、女史は公然世の表面に立ちて活動すること少なかりき。然れども、有爲なる女史は、多病の故を以つて安息せず。而して、健忘なる世人も、女史の名をば終に忘れ得ざりき。政府は印度軍隊衞生のことに就きて、しばしば女史に向ひて助言を求むる所あり。かくて、女史はクリム從軍以來、深く心を軍隊衞生及び社會の衞生問題に潛め、

實際にまた學理に徴して著しし數篇の書は、皆切實にして斯の道の良指導たらずんばあらず。

女史が、クリム戰爭に、初めて戰地看護の實例を天下に示ししより後十年、歐洲諸國の有志、瑞西の國都ゼネヴァに會して、戰爭に於ける傷病者取扱の狀態を改良せんことを圖り、すべて野戰病院は中立とし、其の內にある者及びこれに關係する者は、戰鬪以外の者と見做すことに定めたり。これ、所謂赤十社の濫觴にして、女史は先進者として、其の創立の事に直接間接の助をなせる事少なからざりき。かゝる空前の大事業を成功せし女史は、實に千九百十年八月、病を以て沒せり。年九十一。

徴—徵

態—熊

二五、赤十字社

古の戰爭は、概ね敵を殺すを以て主要なる目的としたりしかど、近年に至りては、戰爭の術大いに進歩して、たゞ敵に戰ふべき力を失はしめんことを務め、捕虜の如きも、既に抗敵の心なきものは、鄭重に待遇して、妄りにこれを殺すがごときことなし。ことに、文明の諸國には、各〻赤十字社と稱するものありて、互に條約を結び、若しこれに加盟せる二國、戰端を開く事ありとも、負傷兵及び病兵に對しては、彼我ともにこれを救護すべき規定なり。されば、甲國の軍勢、乙國の病院を圍むことありとも、赤十字の標章あるを見る時は、決して

虜—慮

千八百五十年　我が孝明天皇の嘉永三年に當る。

これを捕獲することを得ざるなり。

赤十字社は、西暦千八百五十餘年、クリム戰爭の時、英國の婦人ナイチンゲールが奮ひて戰地に赴き、負傷兵または病兵の看護に從事したるに萌ししが、後又、千八百五十九年ソルフェリノの大戰に、墺・佛・伊三國の兵數十萬、伊太利の原野にて、連日連夜苦戰せし時、瑞西國のアンリーデュナンといふ人、親しく戰地に赴きて、負傷者等が困苦の慘狀を目擊し、直に一書を著して世人の注意を促したるより、有志の人々、瑞西國ゼネヴァ府に會し、此處に一社を設けて、戰爭に於ける傷病者の救護手段を議することとなれり。これ實に赤十字社の濫觴ともいふべきものなり。赤十字社の名は、その會

盟地たる瑞西國の國旗に因みて、白地に赤十字の徽章を用ひしに由るなり。後千八百六十三年、卽ち我が文久三年、終に廣く各國の同志者を招きて、ゼネヴァ條約を締結し、此の地に萬國赤十字中央部を置きて、各國の諸社と互に連絡を通じ、其の基礎ます〳〵鞏固となるに至れり。

我が邦にても、明治十年、西南の戰爭に際し、傷病者を救護する目的を以て博愛社を組織せしが、亂平ぎて後も、これを永久常設の一社とし、一朝事ある時、救護のことに從はんことを期したりき。然るに、明治十九年、我が政府ゼネヴァ條約に加盟せしを以て、此の社は政府の認可を得、日本赤十字社と改名して、萬國赤十字中央部と交通を開き、天皇皇后兩陛

待—侍

下の御保護の下に、專ら報國恤兵の事を掌り、旁、天災地變の際に、傷病者の救護を務むるに至れり。

日清戰爭に際して、この社が、一般に軍人・軍屬の救護事業に盡力せしは勿論、特に、清國は未だこの條約に加盟せざるのみならず、清兵の我が負傷兵を待つこと、殘忍酷虐を極めたりしに、我が赤十字社衞生部員は、彼の傷病兵を遇すること少しも我が傷病兵と異なることなかりければ、彼等は皆叩頭感泣して、我の仁惠を拜謝したりといふ。また、近く日露の大戰役に際して、我が赤十字社の活動の目覺しかりしは、普く世人の熟知せる所にして、我が陸海軍の名譽と共に、相竝びて邦人の美德を世界に發揚せしこと鮮少ならず。今も

猶、萬國の讃稱して措かざる所なり。（國語漢文教程による）

二六、乃木大將

穀—殼—穀

大正元年九月十三日、明治天皇の大喪儀を東京青山に行はせ給ふ。全國民は齊しく遙拜の式を擧げ、愁雲海の內外を蔽へり。輦轂の下なる市民は、今日を限の行幸を拜み奉らんとて、老いたるも若きも、御道筋に跪き奉る。午後八時、轜車の御車寄を離れさせ給ふを合圖に、一發の砲聲は闇を破りて、幾百萬臣子の心腸に響きぬ。此の時、軍事參議官學習院長陸軍大將伯爵乃木希典は、

うつし世を神去りましし大君の

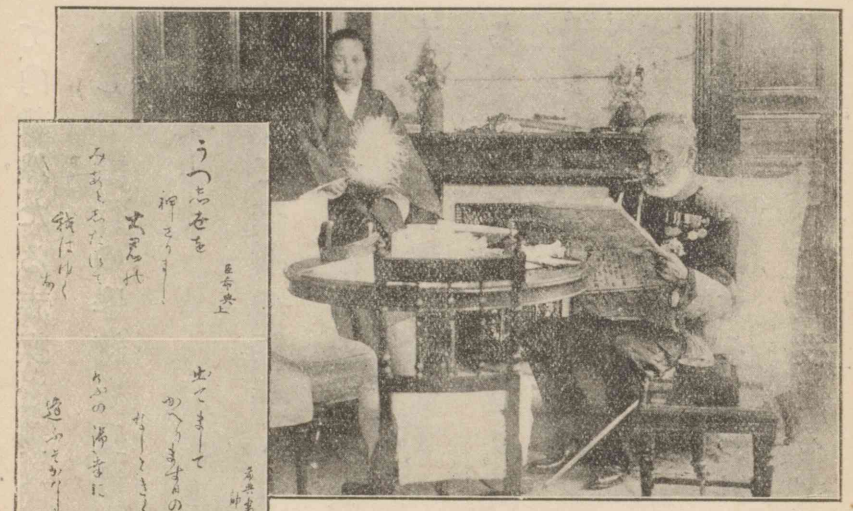
みあとしたひてわれは行くなり。

の辭世を殘し、赤坂新坂町の自邸に割腹して果てぬ。夫人靜子、亦夫に後れじと、

出でまして還りますと日のなしと聞く
今日のみゆきに逢ふぞかなしき。

の歌を留めて自ら刃に伏せり。濕り勝なりし秋の夜の、やうやうしらみ行く頃、この悲しき飛報は滿都の市民を驚かしぬ。電音は直に全國に傳はり、全世界に擴りぬ。先帝追慕の涙にかき暮れし六千萬の國民は、更に又、大將夫妻を悼む悲歎に沈めり。

世界各國の新聞紙は、先帝の盛德・大業を稱へて、大喪儀の



森嚴なりし記事を揭ぐると共に、大將夫妻の壯烈なる殉死を哀悼し、「是實に日本古武士の精神の新日本に磅礴せるものなり」と論じたり。

乃木大將の一生を通觀すれば、實に武士道の權化たりき。嘉永二年、長門國長府の一藩士の子として生まれ、嚴肅なる家庭の教育を受け、武藝を學び、經學を修め、儉素身を處し

て、内毅然たる志操を養へり。その最も私淑せしは山鹿素行にして、素行の學統を受けたる吉田松陰は、亦其の畏敬せる人物たりき。

山鹿素行　兵學山鹿流の祖、名は高祐、甚五衛門と稱す。素行はその號。奥州會津の人。著書甚だ多し。

吉田松陰　長州萩藩の士、名は矩方、寅次郎と稱す。松陰はその號。勤王の志士なり。安政五年幕吏に捕へられて斬らる。

かくて、維新の際、早く身を軍職に委ね、明治四年陸軍少佐となり、十年西南の役には、第十四聯隊長として、轉戰數月、植木の戰鬪に、衆寡敵せず、一隊殆ど全滅し、遂に軍隊の精神たる軍旗を失ふに至れり。此の時憤恨死を決せしが、沮まれて果さず。爾來三十四年間の生涯は、惜しからぬ殘軀を長らへて、力を君國の爲に竭し、以て恥辱を雪ぐの意なりしこと、其の遺書によりてぞ知られける。

二十七八年戰役起るや、陸軍少將として第一旅團を率ゐて遼東の野に轉戰し、二十八年中將に進み、第二師團長に補せられ、二十九年には臺灣總督となり、三十七八年戰役起るに及び、第三軍司令官となり、陸軍大將に進み、露兵の難攻不落と頼みたる旅順要塞を攻むること半歳、遂にこれを陷れたり。旅順陷る後、直に馬首を轉じて北方に向ひ、長驅して奉天の西北に迫り、敵將クロパトキンをして周章狼狽措く能はざらしめしは、歐洲戰術家も亦驚歎して已まざる所なり。

措―惜

大將の二子勝典・保典、亦軍に從ひ、前後相踵いで陣歿せしが、大將は卻てその死處を得たるを喜べり。旅順攻圍中の作なる、

皇師百萬征「强虜」。　野戰攻城屍作山。

愧我何顏看父老。　凱歌今日幾人還。

の詩を誦するもの、亦誰か其の功に誇らず、偏に陛下の赤子を失ひたるを悲しむの苦衷に同情せざらんや。

明治天皇は其の忠誠無二の精神を愛で給ひ、明治四十年學習院長に任じて、華胄の子弟を教育せしめ給ひぬ。

いさをある人を敎の親にして、
おほし立てなむ大和なでしこ。

の御製は、當時の御述懷と承るこそ畏けれ。

大將は此の殊遇に感激して、これより力を育英の事業に盡し、常に忠孝を以て諸生を戒飭し、自彊倦まず、身を以て世風の頽敗を救はんとせり。四十五年七月、先帝の崩御あらせらるゝに及びて、哀悼殊に甚だしく、其の御大葬の日を以て自刃を遂げ、始めて三十年來の素志を果したるなり。其の崇高なる人格、其の壯烈なる最期、誰か之を武士道の權化なりといふに躊躇すべき。

いにしへは楠木氏一門王事に殉せり。其の忠誠は千古仰ぎ見るところなり。乃木氏一門、前には二子の戰役に仆れたるあり、今また夫妻相踵いで先帝に殉す。忠勇至誠直に古楠木氏に接するものにして、光彩陸離永く青史を照らして、千歳の下鬼神を泣かしむべく、懦夫を起たしむべし。

（高等小學讀本）

衷—哀—衰

頽—傾

崇—祟

延喜　醍醐天皇の時。
天暦　村上天皇の時。

二七、朝鮮の風俗

現在の朝鮮の風俗は、わが平安時代の風俗と酷似して居る。抑〻平安時代の文明は、上流社會の文明で、下層の人民は、その惠に與らなかつた。當時の政を延喜・天暦の政治といつて褒めるが、それは、唯、京都と貴族社會の安樂とを意味するもので、一般の人民は、戰爭で苦しむ事は無かつたものの、官吏の中には不法な聚斂家が多くて、それに苦しめられる事は少なく無かつた。隨つて、生活の程度も、貴族と平民との間には、非常な差があつた。家屋に就いていつて見ても、官省又は貴族の家は、瓦屋の宏大なものであつたが、人民のは藁葺の小屋であつた。朝鮮が今にそのとほりで、役所と名の付くものは、皆立派な瓦葺であるが、人民の家は豚小屋同然で、大抵、家を建てるにも、屋根の葺替にも、大工の手をからず、家の人で間にあはせる位、簡單なものである。

衣服も、平安時代には、一般に上衣と下衣とがあつて、男女ともに袴を著けて居た。ところが、武家時代以後、女子は袴を穿くことなく、男子も後には著流しになつたが、朝鮮人は、今日、男女とも袴を著けて居る。日本の武家時代の變化は、惡化ともおもはれる。又、平安時代の女子は、他人に顔を見せぬ。外出する時は、必ず被物をかぶつて、目ばかり出して歩いたものだが、この風が、朝鮮には現に行はれて居る。

日本で男子が冠物を冠らぬやうになつたのは、戰國時代

冠―冠

烏―鳥

からのことで、その以前は、職人でも農民でも、みな、烏帽子なり、頭巾なりを冠つて、髪を露すことはしなかつたものだ。冠物なしで人に面會するのは、無禮としてあつた。朝鮮では今もそのとほりである。たゞ、冠物をかぶらぬのは、元服をせぬ少年に限る。

朝鮮風俗

少年は、元服以前には、皆、さげ髪にして居る。赤い上衣に、紫の袴を穿いて居る。いかにも愛らしい。それが、年頃になると元服する。元服するといふのは、髪を結つて冠をかぶることで、一人前の大人になつた意味である。一人前の成年者だから、妻を持たねばならぬとて、元服と同時に妻を娶る。元服した成人と未元服者とは、階級の別が嚴重で、元服者は未元服者に命令的の言語を用ひ、また、未元服者は元服者の前で、煙草を吸ひ、酒を飲むことをも許されぬ。だから、有力者は、わが子が十一二歳になると、元服を急ぐ。これに反して、無力者は二十を過ぎ、三十になつても元服が出來ぬ。いつまでもさげ髪で居て、他人の輕蔑に甘んぜねばならぬ。かやうな譯から、男子は十一二で元服して妻を持つ。早婚の行はれる所以である。早婚は日本の平安時代にも、元服の制度に伴つて、盛んに行はれた弊害であつた。

弊―幣

食物に就いては、日本では魚類を多く用ひるが、朝鮮では獸肉を多く用ひる。從つて、肉食の發達は非常である。牛のごときは捨てる所が無い。虚弱な人は滋養になるといつて、生血を啜る。また、臟腑も食へば、目玉をも食ふ。目玉一つを一錢五厘で買つて行く朝鮮人を見た。その他、犬でも猫でも食ふ。この點は日本とは違ふが、膳に向へば箸と匙とを用ひる。飯は大きな金椀に山盛にして、盛切一杯で、二杯三杯と代へることのないなども、日本の平安時代と相似て居る。

かくの如く、現代の朝鮮と、七八百年前の日本と似て居る。しかしながら、この類似を證として、全般が日本より七八百年だけ後れて居るとばかりはいへぬ。中には、ずつと進んで

啜—啜

ゐる事もないではない。

畢竟、日本も朝鮮も、その文明は支那を摸擬したのであるが、日本は早くその弊を改めて、固有の國民性を發揮したから、かやうに進んだのに、朝鮮は昔の儘に、同じ事を繰り反して居たから進まぬのである。しかし、かゝる風俗の、朝鮮に保存せられて居るのは、史學の上では、面白い研究材料であるが、追々と日本本國の新勢力に同化し、又、改良せらるべきことと思ふ。

日本人においても、太古からの日韓の關係を知つて、成るべく親切に、懇篤に、この後れた國民を扶助して、早く日本的の良民となすことを心掛けねばならぬ。朝鮮人は、元來、勤勉

擬—凝

な、從順な、しかも、才氣ある國民である。これを善く誘導したならば、立派な人物が出るであらう。われらは多くの善き同胞を得たことを祝さねばならぬ。（萩野由之―講演による）

したならば―出るであらう

二八、ポートサイドより

先便、セイロンよりの拙書、さだめて御落手のことと存じ候。爾來、船足恙なく、アデンを過ぎ、スエズを過ぎて、昨夜ポートサイドに安著いたし候。こゝは御承知のごとく、埃及の東北端にある一小市にて、地中海の入口に候へば、身は今まさに、歐羅巴・亞細亞・亞弗利加三洲の境界の上に立てるにて候。

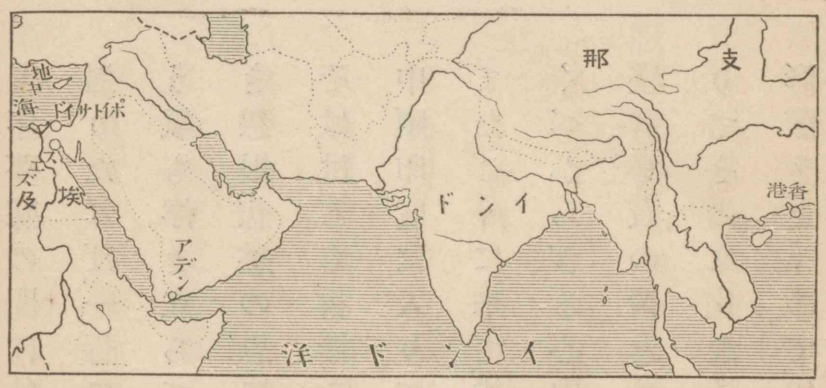
アデン　アラビアの南海岸にある英國領の港。

多年夢寐の間に往來せし歐洲の地も、はや指顧の間に逼りたれば、一行の人々、皆勇みよろこびて、滿船何となう氣も浮き立ちて見ゆるを、不思議や、小生はたゞ限なき怨恨悲愁の思に、ひとり胸をのみ傷め居り候。

そは、はじめ香港を過ぎて、支那衰弊の狀を見しに起り、中頃印度に入りて、その亡國の迹を弔ひしに養はれ、今またこゝに來て、埃及國の貧弱を哀むによりて、全く除くべからざる心中の苦と成り果てたるにて候。

盛者必衰の習とはいひながら、はやく五千年の昔にありて、その文化を世界に誇りたりし國の、今は、たゞその形骸をとゞめて、尖塔堂閣の美、纔に行客の憐を買ふに

陵—稜



過ぎざるなど、いかに悽惨の事に候はずや。嗚呼、これ國民の罪か、そもそも天道の循環いかにともすべからざる數か。これを思ひ、かれを思へば、まことに感慨に堪へざる次第に候。わが船の運河を過ぎしは、日既に三稜洲に落ちて、夕月の影はや沙上にほの見ゆる頃にて候ひき。月は白く、沙は赭く、近き丘のみ黑く峙てる中を、一隊の土人の駱駝に跨りて徘徊する樣の奇なる、その寂寞荒寥の景、

彈—殫

殆ど形狀すべからず。室に入りて寢に就けば、玻璃窗圓く月光を宿し、終宵眠ること能はず候ひき。

其の翌日、ポートサイドに著き候ひしが、夕暮になりて、一葉の小舟わが船の下に漕ぎ來れり。中には一人の美人ありて、人々の投げ與ふる錢をば傘にて受け止め、胡弓に似たる樂器を彈き候ひき。さても其の音の悲しさ、泣くが如く、怨むるが如く、はては訴ふるが如く、心なき人々も、そゞろに征衣を濕し候ひき。小生は、はや堪へかねて、急ぎ船房に退き、輾轉の思に、獨り一夜をあかし候ひぬ。運河の光景、レセップスの偉業、その他記すべきこと少なからねど、今は筆執るに堪へず。なにも後便に讓

輾轉の思　詩經に、「悠哉悠哉、輾轉反側」。

レセップス　フランスの人。スエズ運

河の開鑿者。

打たば―うて

り候。匆々。（落合直文―中等國語讀本）

二九、太平洋（大和田建樹）

怒る波、さかまく潮、打たば打て、襲はば襲へ、
龜の住む島と榮えて、苔のむす巖とたちて、
はてもなき太平洋の海原に、輝き出でし
日の本つ國。
人の世は變り行けども、變らぬは海原の色、
國の樣移り行けども、うつらぬは波風の聲、
ひと筋の天つ日嗣を戴きし國は動かじ、
千代に八千代に。

言とはむ―ありやと

誰か―仰がざるべき

コロンブス

言とはむ、太平洋の海遠くあそぶ嵐よ、
かくの如、動かぬ國は、天地にたぐひありやと。
神代より、根ざし堅めて、君と臣、ひとつ心の
國はこの國。
夜は明けぬ、年は還りぬ。鏡なす初日の影は、
亞米利加の岸まで續く海原に浮び出でたり。
誰か見て仰がざるべき、國民の心もならへ、
光みがきて。

三〇、獨立戰爭

コロンブスの亞米利加を發見せしより、歐羅巴諸國の人

伊太利の人、クリストファー、コロンブス。亞米利加發見一四九二年。

民は、新世界の富を占有せんとて、先を爭ひて移住せり。殊に、英國人は艱難に勝ち事業を爲すべき氣力に富みたれば、最も困難なる場處をも憚らず、極寒の氣候に堪へ、土人の暴虐を凌ぎ、忽ち廣大富饒の殖民地を成せり。

その後、英國は屢〻他國と戰ひ、國費多端になりて、賦課の重きに堪へざりしかば、殖民地の富饒を妬む念漸く萌し、遂に己が負擔を米國人に負はしめんとしたりき。

豈にー知らんや

然るに、米國人は皆相謂ひて曰はく、「英人は唯英國の稅を議すべし。吾等が金囊を覘ふべからず。吾等が艱難辛苦は、英人豈にこれを知らんや。一度不當の賦課に應ぜば、遂に際限なからん」とて、一人も本國の命を奉ずる者なかりけり。英國

ボストン北米マッサチューセッツ州の都會。

政府は、その氣色を見て思へらく、命令を奉ぜずば、兵力を以てせんと。乃ち、軍隊を米國に派遣せしかば、米人の激昂はますく甚だしく、遂にボストンにおいて、兵士と人民との間に一場の爭鬪を起ししこそ、亞米利加十三州の爆裂の導火とはなりにけれ。

從はばー死なん　餓死せんよりはー死ねや

かくて、戰爭は數年に彌れり。暴威に從はば饑寒に死なん。暴威に逆はば砲丸に死なん。見苦しき餓死をせんよりは、唯戰場に死ねや、死ねや」とて、米人は皆必死を極め、老いたるも若きも、萬事を拋ちて戰場に向へり。兵糧・彈藥は盡くれども、米人の氣力は衰へず。刀曲り槍折るれども、米人の精神は挫けず。衣は敝れ、靴は無く、跣足に血は流れて雪を染むれども、

米人が高潔なる正氣は、つゆばかりも汚辱を受けざりき。

老女の二人の子を持てるありき。兄は十五、弟は十三なりけるを、今はとて軍に出さんとするに、家素より貧しかりければ、たゞ一挺の庖刀を兄に持たせ、弟には錆び朽ちたる小刀を與へたり。弟は稚心に、「我もあの樣なる庖刀を持たばや」と羨むを見て、母は涙を流して、「あはれ、不便の者どもかな。汝、貧家に成長し、其の庖刀を上なきものとや思ふらん。早く戰場に赴き、敵の大將と見ば、引き組んで捻ぢ倒し、黃金作の陣刀を分捕せよ」と、誡め勵まして出し遣りけりとかや。

誠に、人の一念ほどおそろしき者はなく、一致の力程强き者はなし。かくまでに凝り固まれる米國人を率ゐるは、智勇

稚―椎

兼備にして、清廉高潔なるウォシントンなりければ、歐羅巴に猛威を振ひし赤隊も、襤褸を纏へる米國人に勝つこと能はず。日に輝ける利劍も、竹槍・石礫に敵すること能はず。終に萬國の公認を得て、米國は英國の羈絆を脫し、獨立の布告を發せり。これ、實に西曆一千七百八十三年九月三日なりき。

これより、米國は共和政體を創立し、ウォシントンを大統領に戴きて、亞米利加合衆國萬代の基礎を固めたりき。

（國語漢文教程）

ウォシントン　初代大統領、一七二二年生まれ一七九九年歿す。

羈―羇

一千七百八十三年　我が光格天皇の天明四年に當る。

三一、ロッス夫人 その一

北米の新天地に共和の國を建て、自由の風を吹かせ、愈〻そ

の光を放てる星・條の國旗は、そも何事を語れるか。横に畫かれたる紅・白の十三條、その上隅に羅列せる青天四十餘個の白星、これ何事を意味するか。この紅・白の十三條こそ、建國の由來を説明せる者にして、英國政府の壓制に抗して、奮然蹶起せし當年の十三州を示せるものなれ。四十六個の白星は、その後、合衆國に加はりし幾多の州數を表したるものなり。されば、十三の條は終始變はる事なけれども、星の數は時によりて異同あり。あはれ、この光榮ある國旗を造りし者は誰ぞ。ベッシー・ロッス夫人其の人なり。

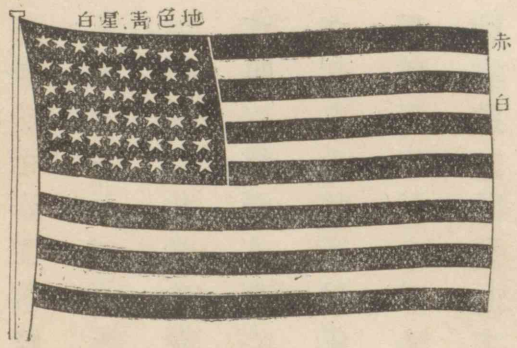
夫人、幼名をグリスカムといへり。父は建築師にして、かの費府の獨立閣の建築に與りたるを以て名を知らる。當時、費

隅―偶

十三條こそ―ものなれ

費府―フィラデルフィア。

府に名高き室内裝飾匠ウェブストル氏の工場ありき。時しも、此の工場にて、衣服の裁縫を受け負ひしが、仕立方甚だ困難にして、襞積を取るに至りては、幾多の工女を苦しましめ、誰一人成し遂げ得べくも見えざりけり。ウェブストルは、夙にグリスカム孃の裁縫・縫箔その他の技に秀でたるよしを聞き居たりければ、こゝに、孃に託するにこの難事を以てせり。孃はこの依頼に應じて來り、その妙手を揮ひて、幾多の工女が手放したる衣服を見事に縫ひ上げぬ。ウェブストル痛く喜び、其の父母に申し送り



合衆國國旗

積―積―績
―蹟

て、孃を己が工場に傭ひ入れぬ。幾程もなく、同じ工場に勤むるジョン-ロッスといふ人の許に嫁ぎぬ。

折しも、北米の人民は、その母國と葛藤を生じ、壓制に逆ひて叫ぶ聲漸く高く、自由の聲各處に響き、義勇の民踵を接して起ちぬ。將軍は劒を按じて勇み、健兒は銃を擔ひて奮ひ、慈母はその子を誡め、貞婦はその夫を勵まし、殺氣天地に漲り、戰雲遂に破裂して、曲直を干戈に訴ふるに至りしかば、ロッスもいかで躊躇すべき、或夜、デラウェーア埠頭の附近に火藥庫を守れる際、不幸にして敵の銃丸に斃れぬ。ベッシーの悲歎はそもいかなりしぞ。されど、徒に涙に暮れて已むべきにあらねば、自ら心を勵まして、己が業務をいそしみ居たり。

雛—皺

三二、ロッス夫人 その二

さる程に、總督ジョージ-ウォシントンは、ベッシーの叔父なる大佐ロッス及び國會の委員等と、ロッス夫人を訪はれて、茲に大任は夫人の雙肩にかゝりぬ。ウォシントンは一の略雛形を示し、「この考案に基きて、然るべき旗を造り得べきか」とありければ、夫人は身に餘る面目を謝し、如何樣にも試みるべき由を答へぬ。さて、よく圖案を見れば、描かれたる星は六角なりければ、「星は五角なるこそ正しき形なるべけれ」と申し進めたり。「我等も知らぬにはあらねど、星は數多くを要すべければ、五角の星を造らんよりも、六角の方、角目正し

早く―映じぬ

く造り得べしと思ひて、かくは描きたり」と、委員等の答を聞きもあへず、紙片を片手にして、鋏を取るよと見るより早く、五角正しき星は、驚き見る人々の眼に映じぬ。

叔父ロッスはいふも更なり。ウォシントンを始めて、委員等も痛く感じ、こゝに六角の星を改めて五角の星と爲し、その他、夫人が申し出でたる考案にも贊同の意を表し、「然らば、旗の事は御身に一任すべければ、星の位置、條の排列、全體の結構も、御身の好むとほりに、その雛形を造り給へ」とて、委員等は立ち去りぬ。

夫人は勇みたち、さま〴〵に意匠を凝らして、經營慘澹、遂に見事なる旗を造り出でたれば、これを國會にさし出し、首尾いかにと待ち居たり。程なく、これを以て合衆國の國旗に採用すべきよし報告あり、また、數多の國旗を造るべき命さへ下りぬ。

程なく―報告あり

夫人の面目・光榮は身に餘れり。その責任も亦甚だ重からずとせず。顧みて、纖弱の身を以て、果してこの大任に堪ふべきかに至れば、健氣なる夫人も、しばしが程は心安からざりけり。多くの國旗を造らんには、少なからぬ材料を要すべく、さりとて、こを購ふべき金とてはあらず。夫人はいたく胸を痛めたりき。されど、「天は自ら助くる者を助く」とか。思ひがけなき多額の金員は、思ひもかけざるに、夫人の手に落ち來りぬ。そは叔父ロッス大佐が、國旗を造るべき命の夫人に下れ

天は云々　スマイルス自助論開卷の語。

りと聞くや、直に多くの金員を調へて、これを送り越したるなりけり。且つ、叔父はこの金員もて、費府に在る旗布をば悉く買ひ集むべきことを告げたり。「徳孤ならず、必ず鄰あり。」夫人は心を決して此の大任に當りぬ。

徳孤ならず　論語に、「徳不レ孤、必有レ鄰。」

夫人は已に十分なる金員あり、十分なる材料あり。前には輝く希望あり。後には寄るべき叔父の同情あり。たゞ己が成功を思ふ外、他に慮るべき事とてはなし。心も樂しく氣も勇みたち、拮据勵精、ひたすらこの大任を全うせんが爲に盡しぬ。かくて、星條の旗は自由の風に翻りて、北米の新天地に、共和國の目標と樹立せられぬ。物變り星移りて、今日においては、夫人の手になりし原始の國旗が、いかに成りゆきしかは

已ー己ー已

ジェファーソン　三代大統領、一七四三年生まれ一八〇九年歿す。

パトリックヘンリー　一七三六年生まれ一七九九年歿す。

フランクリン　一七〇六年生まれ一七九〇年歿す。

知るに由なく、語るに人なきこそ、返すゞも口惜しき事のきはみなれ。

あはれ、十三州の獨立は、歴史上の花にして、ウォシントンの劍、ジェファーソンの筆、さてはパドリック、ヘンリーの絶叫、フランクリンの奔走など、皆人のよく知れる所なるを、千歳の下、仰ぎて當年の活歴史をしのばしむる、この星條の國旗が、一閲秀の手に成りしものなる事は、知る人のありや、なしや。

改訂

高等女學讀本卷五終

大正元年十二月十日訂正印刷
大正元年十二月十三日訂正發行
大正四年十月二十五日改訂印刷
大正四年十月三十一日改訂發行
大正五年一月十七日改訂再版印刷
大正五年一月二十日改訂再版發行

改訂高等女學讀本

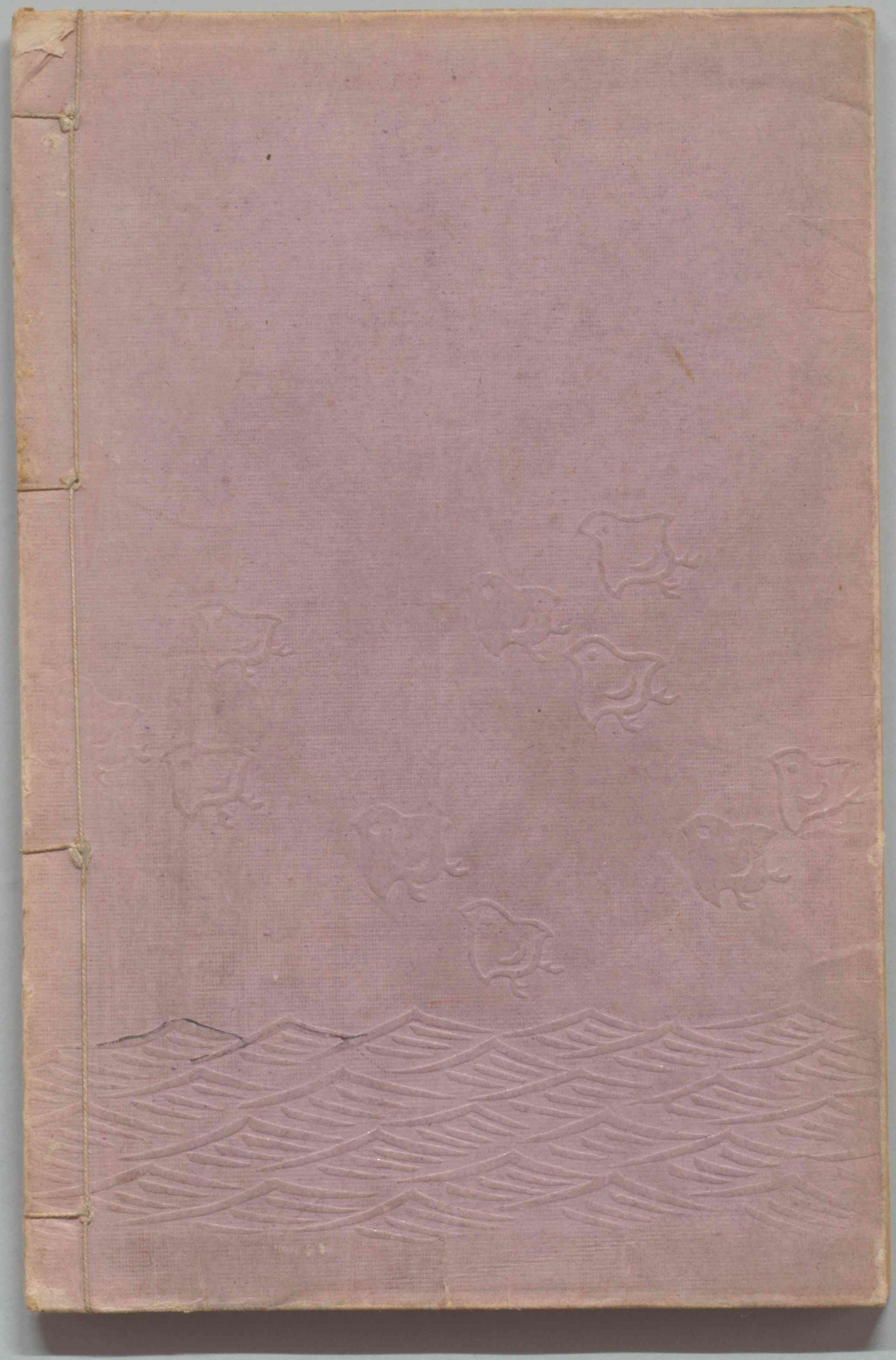
定價 卷一より卷四まで各金參拾貳錢
卷五より卷十まで各金貳拾八錢

著者 佐藤球
著者 鹽井正男

發行者 東京市神田區錦町一丁目十番地 株式會社明治書院 取締役社長 三樹一平

印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿七番地 仙葉元太郎

印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿七番地 株式會社秀英舍

發行所 東京市神田區錦町一丁目一番 振替口座東京四九九一番 株式會社明治書院 長電話本局二四三八番

不許複製